トリップ☆ポケットモンスターBW2！

全テヲ識ル帝ノ龍

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何て事のない日常でポケモンを厳選してたらポケモンの世界に引きずり込まれ、シナリオのキャラクターとして役割を与えられてしまう。

そんな俺に与えられたのは「メイの兄」という役割。

本来なら不要の筈の役目に隠された秘密とは。

厳選したポケモン達を従えた俺の物語が今始まる……！

所で、俺の名前はなんなのだろうか？

７／１０：追記：活動報告に二章ピリオド掲載しました。

目　次

名前の（わから）ない兄。その名も俺。
1―1：お前がお兄ちゃんになるのです☆　―　1
1―2：お兄ちゃん大好きメイちゃん　―　6
1―3：お前の名前はひひひろし？　―　10
1―4：炎負王より天邪鬼　―　16
1―5：初バトルしてる兄妹マジ尊い　―　21
1―6：さらばヒオウギ、また三日後くらいに！　―　28
触れればわかる、その世界
2―1：引き摺られてサンギ、誓いの林へ　―　34
2―2：時空の叫びと忘れ物のお届け　―　41
2―3：ンメリィィィィィップ!!（訳：俺に触れるなァ！）
48
2―4：憤怒と無理ゲーのｖｓＬｖ１００　―　56
2―5：膝枕役は男女逆でもオイシイ　―　63
2―6：俺氏、初のガチバトル　―　69
2―7：いざ行かんヒオウギ、三日ぶりに！　―　77
妹の初のジム戦！見守れ俺！
3―1：初めまして俺の名前　―　85

名前の（わから）ない兄。その名も俺。
1―1：お前がお兄ちゃんになるのです☆

ポケットモンスター、縮めてポケモン。

任天堂社の作り上げた世界でも超有名ブランドのゲームタイトルの一つでジャンルも多岐に渡って存在し、カードや玩具に日用品等々……大人から子供に愛されるコンテンツだ。

そのポケモンが此処まで有名になったルーツが１９９５年…正確には１９９６年の２月にゲームボーイソフトとして発売された「初代」と呼ばれるポケットモンスター赤、緑が当時ブームとなったのがきっかけ。

それからもポケモンは色んなタイトルを出していき、今となっては世界大会が開かれるほどの人口を誇る。

勿論、ポケモンの世界大会は甘くない。ゲームのハードを越えての「厳選」と呼ばれる作業で選び抜かれた「めざめるパワー」「性格」「個体値」を持つポケモンを引き当てるのには相当の苦労と根気が必要になる。

その作業時間は数時間で終わるものもあれば一週間もかかる時もあるこの作業をこなすユーザーは専ら「廃人」と呼ばれ、世界大会の出場者は廃人が殆ど。というか県大会の時点で廃人じゃないユーザーがいないのが普通でもあるが。

そしてこの物語の主人公である俺もまた、その県大会に向けてポケモンを厳選していた…

……

「性格不一致ィ…」

画面に映る捕獲したポケモンの性格にガクリ、と項垂れる。心が折れるとめざパをいれない路線なら多少の妥協はするがそれでもキツツい。さっきからスマホの個体値計算アプリと３ＤＳを延々と交互

に見ててそろそろ目が疲れてきた。
　因みに現在プレイしているのは２０１２年頃発売された「ポケットモンスターブラック２」とよばれるポケモン初のナンバリングタイトル。
　前作と舞台は同じでも２年後の設定でフィールドが色々変化した為、前作プレイヤーもまた新しい気持ちで始められる。また前作のラスボスでもあったキャラクターのポケモンが手に入る事もあって、前作プレイヤーへのファンサービスもある事から個人的には前作をプレイしてからこれをプレイすることを推奨している。主人公デザインは男の子は正直前作の方が好みだったりするけど。

「はぁ……これで何匹目だ…」
　軽く百は余裕で越えただろう作業に深い溜息と終わらない厳選作業に悟りを開きつつある俺。こういう時はイーブイ♀６Ｖ性格一致のタマゴ作業を思い出して頑張ってる。あれに比べたらまだマシだと思えるから。
「やっべ…ボール補充忘れてる……」
　マジかよと思いながらも、適当な町へ「そらをとぶ」で移動してポケモンセンターに入る……すると、見慣れないＮＰＣがショップ店員の近くにいた。
「…あれ、不思議な贈り物のＮＰＣ？たしかＢＷ２の贈り物サービス終わってた筈だよな…」
　不思議な贈り物は配信サービスの一種で映画やイベント等で特別配布されるポケモンを受け取るＷｉ―Ｆｉサービスだったのだけれども…ポケモンの世代交代もあって、ＢＷ２のＷｉ―Ｆｉサービスは終了した。
　おまけに今プレイしているデータは一度綺麗さっぱりリセットして一から始めたデータなので不思議な贈り物をした時に現れるＮＰＣは絶対に現れない筈…なのに画面には確りと所定の位置に立っている。
　バグかな？と思って、万が一に備えセーブを行った後、そのＮＰＣ

に話しかけた。

【おめでとうございます!!あなたは見事兄に選ばれました!! 】

「……はぁ?兄って、何の?」

【メイ　の　お兄ちゃんです!!】

「……うわぁっ!?」

　答える筈のないであろう質問にＮＰＣが答え、驚いて３ＤＳを離す。たまたま?と思い恐る恐る画面を覗き込むと、ボタンもタッチパネルも触れてないのに勝手にテキストが進みだした。

【私達の世界は今危機に瀕しています。しかし貴方もご存知のこの世界で主人公になる筈のメイには一つの問題がありました】

「……な、な、なんだよ、これ!?」

【それは、……の相手がいなかったことです。それによりメイはプラズマ団にその身を置いてしまい、イッシュ……いや、ポケモンの世界はメチャクチャになりました】

「はぁ!?…そんなストーリー、知らないぞ!?ってか何なんだよこのテキスト!バグにしては出来すぎだろ!?」

【なので、貴方に此方側へ来ていただき、貴方にはメイの……になってほしいのです】

「い、意味がわからねぇ!くそっ!」

　段々怖くなってきた俺は３ＤＳの電源ボタンを長押しし、不気味なこの状況にピリオドを打とうとした…なのに、電源は落ちない。

　ｈｏｍｅボタンを押しても中断されず、スリープモードにもならない。データ破損覚悟でカードを抜いても、テキストは勝手に進み、やがてよく見た選択肢が現れた。

【此方側の世界に来ますか?

　＞　はい　はい】

「……ひっ!?」

　ビクッ!と震えた途端、誤ってボタンを押してしまい、聞きなれたＳＥがスピーカーから出てしまった。

「し、しまった!!」

【来てくれますか！ありがとう！】
「ち、ちが……！」
【それでは、貴方の所持してるポケモンを３匹選んでください！一度しか出来ないのでよーくかんがえて下さいね！】
　テキストが進むと今度はポケモンの選択画面が現れた。下画面にはボックスに入った俺のポケモンが。ここでもさっきの強制終了させる一連の行動を取ったけど無理だった。
　いっそのこと放棄しようとも思ったけど手以外の身体が重りを付けられたかのように重い。手だけは自由に動くと言うことは、もはや逃がさないと言うことだろうか。
「く…や、やってやらぁ!!」
　覚悟を決めてポケモンの選択に入る。３枠全てに６００族を入れて安定を図ろうと思い、バンギラス、ガブリアス、メタグロスを選択しようとしたら後の２匹が灰色の枠に囲まれた。
「６００族１匹までかよ…!?」
　やむを得ずハチマキテンプレガブリアスを選択。陽気鮫肌の攻撃と素早さ極振りといったテンプレ構成。技も逆鱗と地震といったメジャーなものばかりだけど、こいつには何度も助けられ、ＢＷ２では相棒の様な感覚で接していた。また頼むぞと画面のガブリアスに語りかけると、ガブリアスの鳴き声が流れた。
　２匹目はイーブイ♀厳選によって獲得したグレイシア。控えめの体力特攻極振り個体。俗にいう嫁ポケというやつで、特に選ばれやすいイーブイ系統の内の１匹。しかし嫁ってだけで弱いのは嫌だという廃人は大体俺と同じ様に更に厳選をする。因みにイーブイの♀の割合は狙ったかのように低いのでそれがまた一段と厳選を難しくしていたりする。
　最後の３匹目は悩んだ結果ウォーグルに。
　素早さ的にムクホークの方が良いのだけど、個人的に好きなポケモンだったのでコイツを選んだ。性格は陽気で攻撃と素早さ激戦区の８０族である事から素早さの極振り。メインウェポンの岩雪崩とブレイブバードの火力は伊達じゃない事をぜひとも教えてほしい。

【それでは、健闘を祈ります！夢と冒険に満ちたポケットモンスターの世界へ！】

「や、やっぱり…！う、うわぁあっ!!?」

ウィンドウが閉じられると、３ＤＳの画面から目映い光が広がって視界が何も見えなくなっていく…意識が途切れる直前に見えたのは、画面の向こうに見える見慣れた部屋の風景だった。

1―2：お兄ちゃん大好きメイちゃん

……

今日はアララギ博士という人の助手さんからポケモンを貰える日。数日前にお母さんからその話を聞いたとき、私は胸が踊った。

お兄ちゃんのポケモン達を見て、いつか私もお兄ちゃんの様なポケモントレーナーになると意気こんで……その始まりが今日なのだ。

「ん……よしっ！」

旅立つ為にお母さんが用意してくれた服を着て、鏡の前で確認……変なとこもなし。少し胸が苦しいかなと思ったけど、それは後で調整するとして…準備が出来た私は隣のお兄ちゃんの部屋へ乗り込んだ。

いつもなら起きてる筈のお兄ちゃんが珍しく爆睡していて、ベッドで死んだように眠っていた。もしかして、私の旅立ちにドキドキして眠れなかったり……なーんて。

「お兄ちゃん…」

「……」

お兄ちゃんの寝顔をじっと見つめる。整った顔で起きてるときはカッコいいのに、寝顔はとっても幼く見えて可愛い。

いつも私の事を守ってくれて、かっこよくて強いポケモン達と仲良しで…そんなお兄ちゃんを異性として見るようになったのは…何時からだったのかな。思い出せないけど…お兄ちゃんの事を兄として見れなくなっているのは間違いない。だから無防備な寝顔を見せられると……

「お兄ちゃん…起きて？起きないと……悪戯しちゃうよ？ほ、本気だよ……？」

聞こえない程の大きさで呼び掛ける…当然、目は覚まさない。ドキドキと鼓動がはやくなり、お兄ちゃんの唇に自分の唇を……

「……ん？うわぁっ!?」

「ひゃあっ!?お、お兄ちゃんっ！」

「め、メイっ!?ほ、本物……!?」
重ねる前にお兄ちゃんが突然目を開き、吃驚して咄嗟に距離をとる。ばくばくと心臓が激しく脈打ったままお兄ちゃんを見つめる。
お兄ちゃんも吃驚してるのは…当然だよね。いきなり私がいるんだし…うう、ちょっと残念だなぁ。
……

３ＤＳに飲み込まれ、意識がはっきりしたと思ったら目の前に女の子主人公であるメイがいた。しかも喋った。おまけにおっぱいがイラストよりも大きく見える。
辺りを見回すと、見慣れない部屋に見たことのないポケモングッズ…俺と思わしき少年と女の子の写真等々…見たことない尽くしの部屋。デスクには3つのモンスターボールが。
「本当に、来てしまったんだな…」
「……うん。お兄ちゃん」
「な、なんだ？（め、メイにお兄ちゃんって呼ばれたー……！）」
「その、昨日の約束……覚えてる？」
「…え？」
き、昨日の約束とはなんだろうか。昨日も俺はポケモン厳選していたのでそんなイベントは……というかこのイベント自体初なので対処法に困っているのが現状なのだけど。とりあえず寝惚けてる事にして乗り切ってみよう。
「悪い…寝惚けてるみたいだ」
「もぅ……一緒に旅してくれるって約束」
「…ああ、そうだったな。勿論だとも」
「ホント？一緒に、いてくれる？」
「約束したしな。さて、俺も着替えるか」
「あ…わ、私、外で待ってるね！」
顔を赤くして部屋を出ていくメイ。その途端に張り詰めていた気を緩め、事の重大さを再認識する。夢かと思いつねってみるも痛みを

感じ、頭を抱える。
（マジで来たよ…ＢＷ２の世界…）
　しかも自分が本当にメイの兄になっている。あとメイの視線が兄妹のソレとはまた別な感じがした。何というかギャルゲー特有の恋する乙女の目をしていた……気がする。
　リアルの恋人はゲームだったからこういうのには疎いのが悔しいが、ギャルゲーも一応経験してるから多分近親に対しての禁断の過ちを犯している気がしてならない。
　しかも二人旅の約束とはいよいよ持って怪しい関係としか思えない。過去に何があったのか知りたいが、下手に聞けばメイに不審な目でみられかねない。
（とりあえず、兄妹関係は置いとこう……で、あのボールの中には…）

　試しにボールを一つとり、投げるとグレイシアが現れた。主の俺をみてふりふりと尻尾を嬉しそうに振っている。
「きゅーん」
「やっぱりか……という事はあと２つには」
　ガブリアス、ウォーグルが其々に入っていると…どれも先程選出した俺のポケモン達。ポケモンの世界へ来てしまった事を確定付けてしまい、ガクリと項垂れた。
　どうやって帰るかとか、どうすればいいのかとか色々な悩みが渦巻く。それを見かねたのか、グレイシアがてしてしと脛を叩く。
「慰めてくれるのか？」
「きゅー！」
「ははは…ありがとな、グレイシア」
　撫でてあげると嬉しそうに尻尾をふりふり。グレイシアを連れてきてよかったと感じた瞬間だった。連れてこなかったら心が折れてしまってたかもしれない。
「……いつまでもクヨクヨは、駄目だよな」
「きゅう、きゅーきゅー！」
　元気付けるように鳴くグレイシアに励まされ、心を入れ換えて覚悟

を決める。何をするべきかは分からないけど、やるべき事はこのイッシュをＢＷ２と同じシナリオに納める事。
　その条件としてメイが何らかの鍵を握っているみたいだけど…分からない以上メイとの旅で掴んでいくしかない。
「お、お兄ちゃん……もう、大丈夫かな？」
「裸をみたいならいいぞ」
「ふぇっ!?ご、ごめんなさいっ！」
「…くくっ、よし！着替えるか！」
「きゅう！」
　グレイシアのおかげでからかう位の元気を取り戻し、クローゼットの戸に手をかける。
　開くとそこには数着の服が掛けられているだけでスペースを持て余していた。勿体ないと思いながらも色々みていると、ＢＷ主人公のトウヤが着ていた服を見つけた。何であるのかは分からないけど、丁度いいからトウヤの服を着て扉を開く。
「悪い、待たせたな」
「ううん、平気だよ……カッコいいなぁ」
「そうか？…ありがとな」
「えへへ…お兄ちゃんなら何でも似合うよ」
「ホントか？」
「ホントだもん」
　真っ直ぐに伝えてきたメイに嬉しくて撫で撫でしているとメイの母親から「いちゃついてないではやく行け」と言われた。
　別にいちゃついてないつもりだったのだけど…他人からみたらそう見えたのだろう。メイはそれを指摘されて顔を赤くしてもじもじ…俺を見ては目が合うと逸らすというあからさまな態度になっていた。

1―3：お前の名前はひひひろし？

「それじゃ、行ってきます」
「行ってくるね、お母さん」
　メイのお母さん挨拶をして家を出る。其処には画面でみたヒオウギシティの景色とは違った景色が広がっていて、つい立ち止まって感動してしまう。立ち止まったことに数歩進んで気付いたメイが此方へ戻ってきた。
　まずい、ゲームの画面と違いすぎたからつい止まって見回してしまった…メイの疑問に満ちた顔に冷や汗を掻きそうになる。
「お兄ちゃん？どうしたの？」
「ぁ…いや、今までみたヒオウギの景色も旅立ちの日だとまた一段と変わるもんだなと…ちょっと感動してた」
「ふふ……なんだかお兄ちゃん、ロマンチストみたい。でも、そっか…暫く見れなくなるんだよね…この景色も…」
　そう言うとメイも染々とヒオウギの街並みを見渡し始める。その姿を見てナイス回避だ俺と自画自賛していると、向かいの家からこれまたゲームで見慣れた少年がやって来た。
　とりあえず……名前が分からないので例のあの名前で探ることにしよう。
「あ、ひひひろしおはよう」
「誰がひひひろしだ!?ヒュウだっつってんだろ！毎回毎回わざとか!?」
「ｅｘａｃｔｌｙ（その通りでございます）」
「俺は！今から！怒るぜッ!!」
　キシャー！と飛び掛かろうとせんひひひろし……じゃなくてヒュウ。あれ、コイツゲームでこんなキャラしてなかったような…もしかしなくてもゲーム通りの道では無いのかもしれないと一つの予想が生まれた瞬間、メイが飛び掛かろうとするヒュウの前に立ちはだかった。
「ダメ！」

「おわぁっ!?あ、危ないだろメイ！」
「ヒュウだって！お兄ちゃんになにしようとしたの!!」
「それは！「男の語り合いだメイ。時には拳で語り合う時も男にはあるんだよ」…は？」
「え…そうなの、お兄ちゃん？」
「ああ。だから俺とヒュウは今から語り合う必要があるんだ。メイ、お前を傷付かせない為にも……下がってほしい」
「…やだ。お兄ちゃんが傷付く姿、私みたくない…「俺だって、メイが傷付くのは耐えられない！」お兄ちゃん…っ！」
「いちゃつくなァ!!!」
　スパァン！とハリセンのいい音が俺の頭に響く。何処から取り出したのか聞くのは野暮だから聞かないけど何で俺だけなのだろう…あ、原因俺だったから当然だった。
「ナイスツッコミだ、ひひひろし」
「ヒュウだッ！……ったく、こんなところで油売ってる場合じゃないだろ！特にメイ！」
「……あ！そ、そうだった…お兄ちゃん！いそごっ！」
「え？あ、ちょ……ぐぇっ!?」
　ヒュウに指摘されて気付いたメイが服の襟を掴んでずるずると俺を引きずる形で走り出す。何この娘、男性引きずる程のパワー持ってるとか規格外過ぎませんかね？どこにそんなパワーを隠しているのか…どうみても華奢な体つきをしているけどもしかして脱いだら凄いとか…やめよう。考えたら気分悪くなった。というか考えなくても気分が悪い！だって首根っこ引っ張られてるから！
「め、メイ…ある、けるか、ら……ひきず、るの…くび、しまって、る……！」
「あっ!?ご、ごめんお兄ちゃんっ！」
　慌ててメイが手を離すと、絞まっていた気管が急に開いた事でその場にしゃがみこんで咳き込んでしまう。飛ばされて即殺されるとか洒落にならない。その相手が妹だと尚更。
　そんな俺を見て申し訳なさそうにするメイ。空元気なのは明らか

だけどそれでも心配させまいと呼吸を整え、立ち上がってメイを撫でる。
「ふぅ……俺は大丈夫だから、心配するな」
「ごめんなさい…お兄ちゃん、苦しかったよね」
「一瞬三途の川は見えたが問題ない。いける」
「さ、三途の川……」
「割とキレイだったぞ」
　知らない老人が手を振っていたがあれはきっとお祖父さんだと思う。あと美少女が手を振っていた。どちらも妄想の中だから実際に見たわけではないけど。

……

　お兄ちゃんが気にするな、と言って私に歩幅を合わせながら待ち合わせをしている場所へと歩きだす。
　ヒュウとのやり取りもお兄ちゃんなりの気遣いなのだろうと思うと嬉しさで心がいっぱいになっていく。
（お兄ちゃん、かっこいいなぁ…）
　隣を見上げるとお兄ちゃんの凛々しい横顔が。何かを考える仕草で目的地に歩いてる姿がまたカッコよくて…夢中になって見ていると視線に気づいたお兄ちゃんが此方を向いて笑いかけてくれた。
　その表情に胸を射たれて顔が真っ赤になってしまうと、お兄ちゃんが今度は心配そうに私を見てきた。
「…大丈夫か？」
「う、うん！大丈夫！何でもないよ！」
　覗き込むように顔を近づけてきたお兄ちゃんをかわすように慌てて前を向く。お兄ちゃんがキレイで照れてしまったなんてとても言えるわけないのに、顔が近付いたらどうにかなっちゃいそうだよ…！
「ならいいが…無理はするなよ？」
「うん、お兄ちゃんが心配するもんね」
「まぁ…間違いではないが」

「えへへ…やっぱり優しいね、お兄ちゃんは」
だから好きになったのかな。うん。きっとそうだ。
優しくてカッコよくて、皆の憧れのお兄ちゃん…その気になればヒオウギのジムリーダーにもなれたみたいだけど…多分そうなったらかなりの難所になりそう。
それでもジムリーダーじゃなくて私の旅についていくと言ってくれたのは…嬉しかった。
「ここだな」
「うん。この先の高台でアララギ博士の助手さんが待ってるんだって」
「よし、じゃあ…行こうか」
「うん！」
高台で待つ助手さんと、ポケモン。
私の旅の第一歩が始まろうとしていた。

……

三途の川の下りからばつの悪そうな顔をするメイに「気にするな」と一言言って先に進む。
（順当にいけば高台でベルに会ってポケモン渡された後に…メイがヒュウとの初バトルか）
しかしそう上手くいくのだろうか？本来のストーリーには関わらないどころか存在すらしない”メイの兄”が存在してる時点でもうストーリーが丸々別のものに置き換えられていてもおかしくはない。
もしかしたら助手がベルではなくモブ研究員であるかもしれないし、まさかのチェレンとポジション逆とかありえそうだし…考えれば考えるほど候補がでてくる。
そこでやっとメイの視線が此方に向いていることに気付いて声をかける。かっこいいと見とれていたと見るが…
「…大丈夫か？」
「う、うん！大丈夫！何でもないよ！」

慌てて視線を反らしたメイ。それと同時に確信した。
メイは兄に惚れてる。兄妹としてではなく一人の男性として兄を見ているに違いない。
羨ましい反面今の兄は俺であって兄ではないからメイには申し訳ない気持ちにもなる。兄に対しては只一言「爆発しろ」としか言わないが。
「ならいいが…無理はするなよ？」
「うん、お兄ちゃんが心配するもんね」
「（兄も兄でシスコンかー…）まぁ…間違いではないが」
「えへへ…やっぱり優しいね、お兄ちゃん」
（あざとい、でも可愛い）
嬉しそうに笑うのは卑怯だ。生まれてこの方彼女無しの俺に効果は抜群だ！くっそマジでこの兄爆発しろ。
しかしこれで兄がなぜメイの旅についていくと言ったのかは何となく分かった。シスコンだこの兄。
まあ確かに少女とは思えないプロポーションに美少女クラスの顔面偏差値だもんな。ゲームのなかならまだしもライモンとかセイガイハ辺りにいそうなの質の悪い男に捕まらないか心配で仕方がなかったのだろう。
メイ自身はそういう事情じゃなくて単純に付いてきてくれた事に喜んでそうだが。
（シスコン兄にブラコン妹…）
ベターな展開だなと思いながらも、目的地の手前である高台への階段に辿り着いた。
「ここだな」
「うん。この先の高台でアララギ博士の助手さんが待ってるんだって」
やはり”助手”としかキーワードは出てこなかった。もしここでベルじゃなくて別の誰かなら早々にＢＷ２本編のストーリーと大きく違うのでストーリーの進め方が分からなくなるが、ここで立ち止まってても仕方ない。

「よし、じゃあ…行こうか」
「うん！」
意を決めて高台への階段を上る。
キャラがそのままである事を信じながらも、絶対に経験できなかった筈のポケモンゲームではお馴染みの最初の御三家イベントを生で見れるという期待が俺の好奇心を駆り立てていた。

1―4：炎負王より天邪鬼

メイと共に階段を駆け上がるとそこには見慣れた服を着た少女の後ろ姿が。ここまでは変わっていなくてまだ安心した……が、問題は話しかけた後。

もしベルの性格が変わってたり、後ろ姿は同じでもいざ振り向かせると全くの別人だったりとすると何か変わってると勘違いを起こしてしまいそうだ。

逸る気持ちを抑えられないのか、ベルを見つけたメイが一歩先にでる。

「あの人かな…あのー！」

（さぁ、どうくる……!!）

「あ、やっと来た！待ってたよー！」

全くの杞憂だった。

……

「貴方がメイちゃんだよね？初めまして、アララギ博士の助手…見習いのベルです」

「よ、よろしくお願いします！それで此方が…」

「メイの兄です」

「お兄さん？服のせいかな？トウヤにそっくりだね！」

よろしく！とベルと握手を交わした所で気付く。自分がでしゃばらなければメイの口から兄の名前を聞けた事に。初めてのポケモンを渡されるイベントと生のベルにはしゃぎすぎた俺のバカと内心で自分を咎める。

「あの…ベルさん！ポケモンは…」

「おっと、そうだった！」

バッグのなかからプロモーションアニメで見たのと同じカプセルを取り出してスイッチをおすベル。プシュー！という音と共にカプセルの中が現れる。

ツタージャ、ポカブ、ミジュマルの三匹がそれぞれ入っているモンスターボール。画面越しに何度も見てきた光景を目の当たりにして感極まりそうになるがグッと堪える。その代わりと言っては何だがメイが俺の今の心境を代わりに語ってくれている。
「わぁあ…!!」
「この中に、貴方のパートナーになるポケモンが入ってます！やっぱりワクワクするよねぇ！」
「はいっ！」
「お兄さんも、そう思わない？」
「そうだな。やはりこの興奮は何にも変えられないものがあると思う。メイもその気持ちを大事にな？」
「うんっ！あ、あのっ！選んでいいですか!?」
「勿論！どーぞ！」
カプセルを手渡され、キラキラとした目でモンスターボールを見つめるメイ。年相応…よりは多少幼いがその反応はとても可愛らしく、ベルの頬が緩んでいる。母性的なものを燻られているのだろうか？
「どの子も可愛いなぁ…ねえお兄ちゃん、どの子がいいかな？」
「ん？そうだな…」
安定を図るならやはりミジュマル一択だろう。というかポケモンのストーリーは基本水タイプが安定する。その理由としてはあらゆるタイプに対応できるし、ジムリーダーの大半は水タイプと相性が普通ｏｒ悪いタイプのポケモンを使ってることが多い。
ＢＷ２も同じで苦戦するのはライモン、セイガイハ、ソウリュウのジムリーダーくらいでそれさえ越えれば後はチャンピオンまでそんなに苦戦は強いられない。ツタージャだとセイガイハに有利は取れるけどそれまでの道のりは険しい事になるし、ポカブは……まあ、うん。お察しの通りでとんでもなくマゾい。有利をとれるのはヒオウギとヒウンくらいで後は殆ど弱点を突かれたり、攻撃が通らなかったりと踏んだり蹴ったりの難易度だ。
「…俺なら、ミジュマルだな」
「そうなの？じゃあミジュマルはお兄ちゃんのだね」

「「え？」」
「え？」
　何の躊躇いもなくミジュマルの入ったモンスターボールを俺に手渡してきたメイに困惑する俺とベル。メイに至っては「え？何かおかしいの？」と俺達の反応に困惑しているが、多分俺達の方が正しいと思う。
　提案した自分が悪いとはいえ、ストーリーを進めるのには最適のミジュマルをメイは譲ったのだ。
「メイ、お前な…」
「あ、勿論考えもなしに渡した訳じゃないよ？だって…バトルするのにお兄ちゃんのポケモンだったらこの子達が可哀想でしょ？」
「…成る程そういう事か」
　確かにバトルする相手のポケモンがレベル１００だったら話にならないし、秒で仕留められてポケモンがトラウマ抱えてしまうかもしれない。そういう考えで俺にミジュマルを渡したのかと理解して、引っ掛かる。
「って、俺とバトルするのか？」
「うん…初めては、お兄ちゃんがいいから」
「……」
　カプセルを持って上目遣いで僅かに頬を染めてくるメイ。この妹如何わしい台詞を記念すべき初バトルに使いやがったと思った俺の方が如何わしい。エロゲのやりすぎがここで響いてくるとは。己の思考を恥ずべきと言われても何も言い返せないと肩を落とす。
　ふと、視線をベルに向けると顔を両手で隠していた。
「…ベルさん、なんで顔隠してるんですか」
「ごめんね、尊い」
「尊い!?」
「うん、大丈夫…そうだよね、初めてのバトルは重要だもんね。ただのライバルじゃダメだもんね」
（…〟ただのライバル〟？）
「さ、メイちゃんはどの子を使うのかな？」

「じゃあ…ツタージャで」
（まぁ、そうなるな）
　そりゃ譲った以上タイプが割れてるし有利属性選ぶわな普通…あれ？もしかして俺踏み台にされるんじゃないか？……まあ、初戦の勝ち負けは案外大事だしと思っているとメイが笑顔でツタージャを選んだ理由を語る。
「だって、一番可愛いから！」
「…そうか。大事にな？」
「えへへ…うんっ！」
（まってホントまってしんどい…尊い…）
　可愛らしい理由につい頭を撫でてしまう。油断したら赤面してしまいそうで怖いが、それよりもバトル思考で疑って申し訳ない気持ちでいっぱいだ。
　後ろで手を合わせてるベルのキャラがなんか変なのはもう気にしないでおこう。というかホントにベルなのだろうかあの人。今更になって疑わしくなってきた。
「…妹だからって加減はしないからな？」
「うん。私も…負けないからね」
「威勢がいいな。流石俺の妹だ」
「えへへ…はっ！そ、その手には乗らないよ!?」
「……いや、今のは純粋に褒めたんだが」
（あーもーなんなのこの兄妹）
　其々が距離を取って向かい合う様に立ってボールの待機状態を解除して構える。
　何だかんだ言ってこの世界兼人生初のポケモンリアルファイトを経験する事にワクワクが止まらない。
（お兄ちゃん、嬉しそう…）
「さあメイ、初のポケモンバトルだ！俺から勝ちを奪い取って見せろ！」
「うんっ！」
「いけっ！ツタージャ！／ミジュマル！」

ボールを投げる。アニメで聴いた音が聞こえ、モンスターボールからポケモンが現れる。

この世界で初めてのバトルが、俺を待っていた。

1―5：初バトルしてる兄妹マジ尊い

「ツタージャ！体当たり！」
「ミジュマル、軌道は読めるか？」
「ミッジュゥ…」
「……なら、任せるぞ」
「ミジュゥ」
　メイの簡単な指示に対して多少難解な指示をミジュマルに送る。任せとけと言わんばかりに返してきたミジュマルに任せ、向かってくるツタージャをどう対処するかをじっと観察することに。
「ミ、ジュ…！」
「タジャっ!?」
「ツタージャ!?」
「やるじゃないか、ミジュマル」
「ミジュ…」
　背中でドヤ顔を語るミジュマルに若干腹が立ったがそこは我慢しよう。というかこのミジュマル鳴き声がやったらダンディなのだが。ホントにレベル5なのかと疑いたくなるが、流石にレベルは統一されているだろうと思って次の指示を出す。
「ミジュマル、鳴き声だ」
「ミッジュゥ……」
　鳴き声。可愛く鳴いて対象の攻撃を一段下げる技なのだが…先程も言ったようにミジュマルの鳴き声がやたらダンディなのだ。そんなミジュマルが可愛く鳴くなんてしたらどうなるか？
　…なんて事はない、トレーナー両者共に噴き出すのがオチだ。流石にミジュマルに悪いので俺は堪えたが、メイとツタージャは徐に顔を背けてヒクヒクと口が緩んでいる。
「……すまん俺が悪かった、はたいてくれ」
「つ、ツタージャ…受け流して…」
「タ、ジャー…」
「ミッジュ!?」

「っくく、笑っちゃダメ…笑っちゃダメ……」
ベルが必死に笑いを堪えているが隠しきれていない。さっきの尊い発言といい…ホントにベルなのかも怪しい。
…リスクが高いが聞いてみるのもありか？もし俺と同じ境遇の人なら…協力を促せるかもしれない。
因みに尊いという表現は現在のもので、２０１２年当時では尊いという表現は広まっていなかったどころか音沙汰もなかった。なのにベルは尊いという表現を用いた。
しかも”ただのライバル”という発言…まさか、ストーリーを知っている人だとしたら……俺と同じ？
「ミジュゥ!?」
「やった、当たったねツタージャ！」
「タジャタジャ！」
「あ、すまんミジュマル…」
考えすぎてミジュマルに指示がいかなかった。仰け反るミジュマルに謝ると「何て事はない。まだ続けるぞ」とアイコンタクトで伝えてきた。ベルといいダンディなミジュマルといい、微妙に違うのがもどかしい。
それはそうと初ヒットに喜ぶメイとツタージャが可愛いからまあいいかと思ってしまった。このまま負けるのもありかもしれないけどわざと負けるのはゴメンだ。
「もーメイちゃん…ほんと、尊い……」
（いやマジで”この人”誰だ…!?）
顔を押さえて天を見上げるベル？に疑問がやまない。
見た目はベルなのだが…どうも”中身がベルじゃない”気がする。というかその気しかしない。
俺と同じ憑依者なのか、或いは別の存在なのか…この対戦が終わったら問いただす必要がありそうだ。
その為にも…
「ミジュマル、決めろ！」
「ミジュマァル!!」

「ツタージャ！お兄ちゃんと”同じ”やり方を！」
「タジャ！」
俺と同じやり方。対人対戦であればミラー対面において愚策とも捉えられる相手の行動を真似する”直前”のコピー戦法。そんなの読まれるに決まってるから基本的にやらない方がいいのだが…とタカをくくり、勝利を確信した俺だったが…。
「鳴き声！」
「…何!?」
「たーじゃっ」
「ミ、ミジュゥ……」
可愛く鳴かれてすくむミジュマル。俺がとった”２つ前の”行動をとったメイに驚愕を隠せずに動揺する。
勢いの弱まったミジュマルの攻撃をツタージャは容易に耐え、大きく隙を晒すミジュマル。その隙を逃さなかったメイがトドメの追撃指示をツタージャに送る。
「今だよ！体当たりっ！」
「タジャァアッ！」
「ミィッジュゥッ!?」
「ミジュマル！」
勢いよく突撃されて吹き飛ばされるミジュマル。当たり所が悪かったのかそのまま目を回して延びてしまい、俺の負けが決まった瞬間を目の当たりにした。
「や、やった…勝った、勝ったあ！」
「負けたか…お疲れミジュマル」
「えへへ、初めてなのに勝てたよツタージャ！」
「タジャ、タージャ」
（…嬉しいのは分かるが目のやり場に困るな）
（公式よりおっきいのが揺れとる！揺れとるぞーッ！）
嬉しさが極まったのかぴょんぴょん跳び跳ねるメイ。それに連動してたゆんたゆんと揺れるおっぱい。
それをみた俺の感想としては初めて対戦で負けてよかったと思え

た瞬間だった。勿論ガン見したら兄の評価を下げてしまいそうなのでチラ見程度にして視線を流すとベルがメイのおっぱいをガン見してた。
（…中身おっさんじゃないよな？）
「（おっといかん、お兄さんがこっち見てる…）初勝利だねメイちゃん！おめでとう！」
「ありがとうございます！」
「…まさか負けるとは。俺もまだまだ未熟だな」
「えへへ…お兄ちゃんのポケモンにも勝てるかな？」
「さて、どうだろうな？」
「むー…いじわる」
　そんな簡単には俺の厳選したポケモンを越えさせはしない。メイのこれからの成長によっては越えられる場合もあるが…今はまだその時じゃないし、これからも越えさせる気はないが。
　それはそうと…別の問題をまずは解消しなくては。ベルの正体が何なのか。とりあえずは一対一の対面状況を作り出さなくては。
「はー…もー……尊死しそう」
「…ベルさん、ちょっといいですか？」
「（やばっ）何かな？」
「メイ、新しいポケモンを母さんに見せてくるといい。きっと母さんも喜ぶ」
「お兄ちゃんは？」
「ああ、俺はベルさんに話があるからここに残る。メイが戻ってくる頃には終わらせておくよ」
「わかった。じゃあゆっくりの方がいいかな？」
「それはメイの匙加減に任せるよ」
「はーい！いこっ、ツタージャ」
「タジャ！」
　ご機嫌で自宅に向かうメイ。ブラコンはブラコンでもヤンデレレベルのブラコンでは無いようで安心した。
　そして残ったのは俺とベルさんのみ。この状況なら聞ける…とり

あえず自分が兄であって兄では無いことを隠して話を進めよう。
「えっと、話って何かな？」
「……単刀直入に聞きます。”あなたは誰ですか”？」
「誰って、やだなぁ…ベルだよぅ」
「…質問の内容を変えます。”貴方はベルですか”？」
「……もしかして、疑われてる？」
「ええ。ある知り合いに聞いたベルさんとは些か違う感じがしましたので」
　その知り合いというのは言うまでもなく俺の事。知り合いというよりはストーリーを知っている人なのだが、こういう表現じゃないとスケープゴートを立て辛い。
　因みにスケープゴートとして利用したのはチェレン。ヒオウギのジムリーダーでもあるし多少の関わりはあると予想して利用させてもらった。
「そっか。じゃあその人は私の一面を知らなかったってことだね」
「…尊いとか、よく分からない言葉を使う一面を？」
「うん。あと尊いとしか言えないのは語彙力が臨界点突破してワケわかんなくなってるからだよ」
　知っとるわい。とは言わない。あくまでも知らないふりを徹底して此方のカードは明かさないようにする。
　多分ベルも明かさないように立ち回っているのだろうけど尊いとか言ってるおかげで自分と同じ２０ＸＸ年以降の人間だってことは把握できた。
　後はこのベルが未来の人間なのか、それとも俺と同じ誰かが憑依した人間なのか…それ以外の”何か”なのか。
　聞くのが若干怖じ気ついてしまいそうになるが意を決してベルにそのことを尋ねる。
「ベルさん、貴方は「お兄ちゃーん！」メイの奴…もう帰ってきたのか」
「みたいだね。じゃあこの話は今度…かな？」
「……嬉しそうですね」
「そう見えるのなら、間違いじゃないかも」

無邪気に笑っているベルに不信感を強める。その笑みの裏側で何を考えているのか分からない所がより質悪く見えてしまう。ぶっちゃけ今のベルにメイを近付けると今後ろくでもない事に巻き込まれそうで心配になる。
「お兄ちゃん、お待たせ…何話してたの？」
「それは…「旅の先輩である私にメイちゃんの旅を成功させるハウツーを聞いてたんだよ！ね？」…!?」
どういったものかと悩んでいると思いがけない助け船がベルから提示された。驚いてベルを見るとアイコンタクトで俺に何かを伝えてきた。
（ほら、合わせて！）
「…ああ。そうだ。お前の旅を成功させたいから、そのハウツーを教えてもらっていた」
「そうなんだ…私のためにありがとう、お兄ちゃん」
えへへと笑うメイにどういたしましてと頭を撫でる。
目を細めて嬉しそうに撫でられるメイに一瞬なごむも、すぐさまベルに疑問のアイコンタクトを送る。
（…どういうつもりですか）
（え？いや、尊いシーンを見たかっただけだよ？）
（……それだけ？）
（それだけ）
ホント、このベルは味方なのか敵なのか分からない。
助け船を出した理由がそんなどうでもいい理由であることに呆れながらも、メイに母の言葉がなんだったのかを尋ねると「頑張りなさいって！あとお兄ちゃんには…これを渡してって」と言って渡してきたのは一枚の手紙。メイから受け取った手紙の内容を黙読で読み上げる。
（何々…）
―確りメイを守ってやりなさい。あなたにメイの事は任せたわよ？ＰＳ．もしメイと禁断のアレをヤるならちゃんと最後まで責任持ちなさいよ？―

即座に破いて高台から見える湖に目掛けて全力投球。メイとベルがびっくりしているが気にしない。悪いのはＰＳに変なこと書き込んだ親が悪い。

というか親はさらっと近親相姦を認めるなと。もしメイがこれを見ていて本気にしたらどうするつもりだったんだろうか。

「な、何てかいてたの？」

「…お前を守れと書いてあったよ。言われなくてもそうするに決まっているのにな」

「お兄ちゃん…」

所謂雌の顔になるメイ。嬉しいのは分かるけどその顔はやめた方がいい。俺が賢者でなければ間違いなく路地裏コースに直行してしまうところだったからな。

その賢者モードになれた理由が第三者視点からこの光景をみてまた「尊い…」と言いながら手を合わせてるベルというのは非常に腹立たしく思えるが。このベルが知っているベルならそんなことは無かったのだろうけど知らないからこそ腹立たしく思えた。

1―6：さらばヒオウギ、また三日後くらいに！

高台でのバトルを終えた後、忘れないうちにミジュマルを返そうとしたらそのまま渡された。ベル曰く尊いものを見せてくれた礼だそうだ。本来はライバル枠であるヒュウがもらうポケモンだったのだろうけど…気にしても仕方ないので貰っておくことに。

そのままベルは博士に呼ばれたといって俺達と別れた。去り際に次会うときはもっと尊い状態になってねと食い入る様にメイに告げて。

「尊い状態…？」
「メイは知らなくていいことだよ」
「お兄ちゃんは知ってるの？」
「…ノーコメント」

明らかに知っているけど隠す俺に「えー!?」と抗議の声をあげるメイ。聞いたところで何の知識にもならないし、メイにどうでもいい知識を植え付けるのはあんまりよろしくない気もしたので何と言われようと俺は黙秘権を行使させてもらおう。

「さあそれよりも、行こうじゃないか」
「あ、はぐらかした…もう」
「知ったところで何の得にもならないからな」
「むぅ…私もお兄ちゃんと一緒がいいのに」
「あー…その内教えてあげるから、な？」
「……約束だからね？」
「ああ。約束だ」
「じゃあ…ん！」

ずいっと小指を差し出すメイ。所謂指切りを要求してきて、それに応じる。よく知るメロディを二人で口ずさみながら、指を切った。

「破ったら何でも言うこときいてね？」
「一つだけならな？」
「うん！」

「それじゃ、そろそろサンギタウンに行こう。今からいけば日暮れにはつけるかな…」
「サンギタウンかあ……どんなとこなんだろ」
期待に満ちた目で次の町へ思いを馳せるメイ。初代ポケモンからの設定だとポケモンを持たない人は基本的に入ってはいけない事になっていて未所持者はポケモントレーナーや大人に止められているようだが…そこはゲームと同じ設定を準拠しているのだろうか。
「そうか、メイはポケモンを持っていなかったから行ったことがないんだったな」
「うん…お兄ちゃんはポケモンを持っているから行ったことがあるんだよね？どんなところなの？」
「うん？…そうだな、特徴としては近くに牧場があったな…あと、大きな亀裂の入った岩壁とか。ヒオウギのジムに挑むならまずは此処でツタージャを鍛えて…ポケモンを増やすのがいいと思うぞ」
サンギ牧場でゲットできるメリープは終盤までお世話になるポケモンの一匹で旅のパーティ…通称「旅パ」の候補に採用されやすい。
最終進化のデンリュウはワロストーンエッジとは打って変わって優秀な「パワージェム」を覚えることができ、ポカブやミジュマルを選んだ人はフキヨセとセイガイハを越えるためにもよく捕まえられる。
また対戦では大体ひかえめが選出され、技構成にワロストーンエッジよりも当たらない「気合玉」が採用される事が多い。その命中率は当たったらネタにされる程。
しかし旅パとしてなら気合玉は勿論入れなくてもいいし、初心者にも扱いやすいポケモンだ。
「メリープか…うん、いいかもな」
「メリープ…？」
「行ってからのお楽しみだ。さ、行こう」
「うん！」
階段を下り、ヒオウギと19番道路をつなぐゲートの前でヒュウが壁に寄りかかっていた。どうやら俺達の門出を待っていたようで、俺

達を見つけると近寄ってきた。
「ポケモン、貰えたみたいだな」
「うん！お兄ちゃんにも勝ったよ」
「……マジで？」
　信じられないといった目で俺をみるが負けたことには変わりないので嘘偽りなく本当だと告げる。レギュラーのポケモンではなくこちらも同レベルのポケモンを用意してでのマッチである事もきちんと説明をして。
「ふーん…負けることあるんだな、お前も」
「俺もまだまだ未熟、ということだ」
「だな…で、行くのか？」
「うん。ヒュウとも暫くお別れだね」
「とはいっても三日位したらジム戦のために戻ってくると思うけどな」
「え、そうなの!?」
「いや…この前ニュースでいってたろ。新しいポケモンジムの設置場所がヒオウギになったって」
「み、見てなかった…」
「「オイオイ…」」
　地元なのに地元の事を知らないのは致命的なのでは…といっても俺も俺でゲームで得た知識なので人のことはあまり言えない気もするが。
　とはいえ俺もジムリーダーと戦いたいし、知っているふりをしてヒュウにジムリーダーの名前…チェレンの名前を尋ねる。
「えーと確かにリーダーの名前は…チェレン、だったか？」
「いやそれ二年前の英雄だろ…アデクだよアデク。前チャンピオンの！」
「前チャンピオン!?」
（何ですと!?）
　呆れるヒュウの発言に悪いと平静を装いながらも謝罪と礼を述べて内心で驚く。

チェレンが英雄?だったら前作主人公のトウヤは何処に行ったんだと思った途端、自分の容姿をはっきり見ていないことに気付く。
そういえば家のクローゼットにトウヤの服が入っていたということは…メイの兄はトウヤなのでは?と予想してそれを確認するべくヒュウにあることを尋ねる。
「ヒュウ、カメラあるか?」
「いきなりだな…ライブキャスターなら」
「すまん、何も言わずに俺に着信してくれないか?この前落とした影響でイカれてしまったみたいなんだ」
「おま、それはそのままにしておくなよ…」
適当な嘘をついてライブキャスターを起動させると、まもなくしてヒュウからの着信が来てそれに応じると其々の顔が映し出された。画面をみてヒュウの顔の隣に映るのが…メイの兄、もとい俺。
結論からいうと全くトウヤには似ていなかった。寧ろもといた世界の有名イラストサイトで有志によって理想が詰め込まれた結果イケメン度がマシマシになった主人公「レッド」の姿にそっくりだ。というかまんまそれだ。違う点といえば完全な黒髪ではなく若干茶の入った黒髪だというところか。
「これでいいのか?」
「ああ。登録しておくよ」
「お兄ちゃん、私は?」
「メイは後でな?」
「うん!」
「って、お前名前もフォーマットされてるじゃないか」
「ん?…本当だ」
画面をみて気付いたヒュウが指摘する。確かに名前が現れる筈の場所に俺の画面には表示されていない。
再設定しておけよというヒュウに頷くが、名前がわからないのでやろうにもできない。
(そうだ、トレーナーカード!)
すっかり忘れていた名前を確認できる存在に今思い出した。ト

レーナーカードには兄の名前が記載されているはず！と期待したのもつかの間。
　この兄がトレーナーカードを何処に入れてるのか分からない。聞いたところで知らないに決まってるし、本人が知ってて当たり前の事を他人に聞くのは怪しすぎる。
　考えた結果、やむを得ず断念することに。
「あの、ジムリーダーって前チャンピオンなの？」
「ん？ああ。まあ一番目だし手加減してくれるだろ」
「そうだな。ジムリーダーは相手に合わせてポケモンを使い分けてくれる。だから心配はいらない」
「そうなんだ…」
「勝つには経験も積まないとな。まぁ頑張れよ」
「ヒュウは旅に出ないのか？」
「妹を一人にするわけにもいかないだろ？メイと違ってまだ幼いからな。俺が守っていかないと」
　もう二度とあんな目に合わせないと固く決意するヒュウ…ストーリー通りなら妹のチョロネコはプラズマ団に強奪され、その後チョロネコはレパルダスへと進化して戦闘マシーンにされてしまっている。
　もしこの世界も同じ様にチョロネコが強奪されているのなら…ヒュウのプラズマ団に対する憎悪は計り知れない事になる。
　これも結構気になるが言ったら要らぬ疑いがかかるから聞こうにも聞けないが。
「…そっか、ヒュウの妹さん……」
「言うなよ？言ったら例えメイでも本気で怒らないといけないからな」
「うん。お兄ちゃんとヒュウの大喧嘩みてるから分かってるよ。妹さんによろしくね」
「ああ。二人もまた戻ってきたときにでも会いに来てくれ。妹も喜ぶだろうからさ…引き留めて悪かったな。身体には気を付けろよ？」
「…父親？」
「いやお前と同い年だろーが…」

ガクリと項垂れるヒュウのおかげでヒュウと同い年だということが分かった。それでも名前は未だに分からないのがとてももどかしい。

「じゃあ、行ってきます」

「元気でな、ひひひろし」

「ヒュウだっつってんだろーがぁぁっ!!」

「ぐはぁ!?」

「お、お兄ちゃーん!?」

ヒュウのスカイアッパー!急所に当たった!

俺は気合のタスキで持ちこたえた!

ヒオウギを旅立つ最後にヒュウのスカイアッパー。キレイに嵌まったが耐えきれたのも心の中の気合のタスキで何とか持ちこたえることに成功したが、めちゃくちゃ痛い。最後の最後でやらなくてもいい事をやって痛い目をみた後にメイに引き摺られる形でヒオウギを後に。

何とも締まらない冒険の始まりだった。

触れればわかる、その世界
2―1：引き摺られてサンギ、誓いの林へ

ズルズルとメイに引き摺られたまま19番道路を越えるとは思わなかった。おかげでスゴく尻が痛い。
摩擦で破けてるんじゃないかと思ったけどやはり冒険の適している服なのか全く無傷だった。
それよりもメイの筋力の方が驚きだが。涼しい顔で俺を引き摺る姿はまさに怪力のそれ。何がすごいかって引き摺ったまま野生のポケモン相手にツタージャへ交戦指示を出していたということ。変なところで器用な一面を見せられた。
「…」
「お兄ちゃん？」
「……メイ、鍛えてたのか？」
「え？鍛えてないよ？」
「…そうか」
「そんな事よりも、ここがサンギタウン？」
期待に満ちた目で聞いてくるメイ。
入ってすぐに見える大きな時計台とその奥には前チャンピオンのアデク宅らしき一軒家が。やはりゲームとは違って宿など知らない施設や家が多いが、この二つだけでここがサンギタウンだということは理解できた。
「ああ。ここがサンギタウンだ。大きな時計台がシンボルマークで…前チャンピオンのアデクさんの家もサンギタウンにある」
「そうなんだ…」
（…そろそろ来るか？）
「よーお！新米トレーナー！」
（来た来た…って、アイツは……！）
「えっ？ええっ!?」
人が飛び降りたらまず死ぬであろう崖を軽く飛び降りて着地して

此方にやって来たのはアデク…ではなく、アデクの孫であるバンジロウ。
「ほー…お前、ツタージャを選んだのか！」
「う、うん…えっと、貴方は……」
「おいらはバンジロウ！じいちゃん…アデクの孫だ！」
（まさかアデクとバンジロウが変わってるとは…いや、アデクがジムリーダーになったから流れでいけばそうなるよな）
「ふーん…お前はともかく、そっちのにーちゃんのポケモン…かなり長い付き合いだろ？」
「…分かるのか？」
「おう！多分相当お前と戦ってきたんだろうな。お前のこと、信頼してるヤツばっかだ。ミジュマルはまだ苦労がたりねぇみたいだけど」
「会ったばかりだからな」
「なるほどな！納得できたぜ！」
　流石はアデクの孫、俺の厳選ポケモンを一目で見抜いた上になつき度ＭＡＸであることも教えてくれた。
　確かにＢＷ２には最新作のＵＳＵＭ系列やその前作であるＯＲＡＳと違って努力値を簡単に割り振れる施設がなかった。なので栄養ドリンクやパワー〇〇といった努力値加算アイテムを持たせて対応した努力値を持つ野生のポケモンを倒しまくることで初めて完成するのが極振り個体というもの。グレイシアの特攻を極振りにするために何度ヒトモシを狩ったことか…今となっては懐かしい。
　そんな苦行とも呼べる作業を続けてきた俺とポケモンの間に絆が出来ているのは嬉しいことだ。
「今すぐにでもバトルしてぇけど…じいちゃんとの約束があるからな。まずはそっちからだ」
「アデクさんとの約束…？」
「おう、お前らを誓いの林に連れてけって」
「誓いの林……？」
「ま、行ってみりゃわかる。案内してやるよ！」
「ああ。ありがとう」

気にすんな！と元気に返してくるバンジロウ。いずれバンジロウもアデクのようになるのかと思うと…容易に想像できた。うん。アデクの特徴をしっかりとらえた初老になりそうだ。ここまでくるとバンジロウの親が気になるが…多分会うことはないだろう。
「誓いの林かぁ…誓いって呼ばれてるくらいだから昔に結婚式とかで使われてたのかな？」
「かもしれないな」
ゲームだと配信限定ポケモンの「ケルディオ」に固有技「神秘の剣」を覚えさせるためのキーイベントとして描かれている。なのでケルディオを所持していないユーザーには縁の無い場所だが…もうゲームの知識を信じる訳にはいかない。
きっと誓いの林にも何かカギがあるに違いない。
「おーい、どうしたんだー？」
「ああ…って速いな」
「おまえらが遅いんだよー！」
「バンジロウくんとは鍛え方が違うのー!!」
「…合ってるようで合ってない気がする」
「え？そうかな…？」
「はやくこねーとおいてくぞー！」
「仕方ない、少しペースを上げようメイ」
「うん！」

……

バンジロウについていくこと数十分…道なき道を行くバンジロウに俺とメイは既に疲弊していた。何で路地裏とか屋根の上とかを通るのだろうか。忍者や怪盗じゃあるまいし…と内心で愚痴りながらも必死についていった辺り自分達も大概だと思われそうだが。寧ろ自分がついていけた事に驚きだ。兄の運動神経様々といった所か。
「よーし、ついたぞ！…どうした？」
「いや、どうしたもこうしたも…大丈夫か、メイ」

「な、何とか大丈夫だよ…お兄ちゃん」
「なんだ、まさかバテたのか？」
「「いや、あのルートはバテる（だろ／よ）…」」
　息を整えながらバンジロウの異常性を指摘する俺とメイ。当の本人は何を言ってるのか分かりませんという顔をしたあとに「都会育ちって大変だな」と同情してきた。本当にバンジロウの親が見てみたい。いったいどういう教育したらこんなパワフルになるのだろうか。
「まぁいいや、ここが誓いの林で…あそこにある岩壁に亀裂が入ってるのが見えるか？」
「…ああ、あれか？」
「すごい大きな亀裂だね…ポケモンの技でできたの？」
「おう。伝説のポケモンの技でできた爪痕らしいぞ」
（コバルオン、テラキオン、ビリジオンの3体だな）
「で、この亀裂のおかげでこの岩壁にはその伝説のポケモンの力が宿っているみたいでご利益として触れに来る人もいるんだと」
「パワースポット、ってやつだな」
「そうなんだ…ねぇ、触れてみてもいいかな？」
「いいぞ。ってかその為に案内したからな」
「それじゃ遠慮なく…」
　岩壁に近付いてそっと亀裂に触れるメイ。一分ほど触れた後にあまり実感が沸かなかったのか疑問の表情で此方に戻ってきた。
「…これでよかったのかな？」
「まぁご利益みたいなもんだからな」
「何か釈然としないなぁ」
「まーそういうなって。んじゃ次、お前な」
「俺もか？」
「いかねーの？」
「いや行くが」
　そういって今度は俺が岩壁に向かい、亀裂に触れる。
（……まぁ、だよな）
　ヒオウギでの一件で変に身構えてしまったがやはりここは特にこ

の世界とは関係ない事だと思い手を離そうとした瞬間…突然”ソレ”は起きた。
強烈な目眩と頭痛が俺を襲い、その痛みに耐えきれず膝をついてしまう。
「お兄ちゃん!?」
「おい、大丈夫か!?」
「つぐ…ぅ!」
突然起きた体調不良に慌てて駆け寄ってきたメイとバンジロウが心配の声を投げ掛けるもそれに答える余裕もなく、ただ痛みに抗うように唸るしかできない。
目眩に意識を持っていかれそうになった瞬間…一筋の線が視界を過ったと思った途端に”今見ている視界とは別の映像”が俺の視界に映し出された。

……

「じゃあ、メイは…!」
「ああ。このままだと……に……かな」
「…どうにか、どうにか方法はないのか!?」
「あるにはある。でもそれは……」
第三者視点で映し出された光景にいたのは誓いの林で張り詰めた空気を出す俺と…何か。
俺が見上げながら話しているということは少なくとも身長は俺を悠々と越えているみたいだ。
視界が悪いのか、辺りは靄がかかっているように真っ白で見渡すことはできない。
その上、会話の所々でノイズがかかっているみたいに聞き取りづらい箇所が多く、肝心の情報が歯抜けの状態でもどかしく感じてしまう。
何かによって告げられた”方法”に膝から崩れ落ちる俺。余程残酷な方法だったのだろうか、表情が絶望に満ちていた。

「そん、な…」
「これが現状で…とキミで行える最善の方法だよ……でないと、イッシュは文字通りの死地となる。他ならぬ……によってね」
「じゃあその前にメイを…!!」
「…そうしてほしいけど、そうもいかないみたいだ……が此方に気づいた」
「くそっ…! 是が非でも近付けないつもりか…!!」
「みたいだ。一旦退こう」
「っ…絶対に、助けるからな……!!」
何かに追われている、と言うところで映像を強制的に打ち切るようにまた線が視界を過った。

……

「っはあっ! はぁっ……!!」
「お兄ちゃん、お兄ちゃんっ!!」
「おい、しっかりしろ!!」
「……っ、は…メイ、バンジロウ…?」
「っ、お兄ちゃん!!」
「うぉっ!?」
メイが抱きついてくる。人目を気にしろと言いたいが涙目になっていたのを見てしまったので言うに言えない。
「良かった…良かった……っ!」
「…どうなったんだ?」
「えっとだな…簡潔にいうと、あの亀裂に触れたお前が急にうめきだして倒れた…大丈夫か?」
「……ああ、今はもうなんとも。多分亀裂にふれても「だめっ!!」…だそうだから触れないでおく」
「だな。さすがのおいらも止める…その、すまん!」
「気にするな。誰も予想できなかった事だ」
流石に激痛イベントを用意されていたとは思わなかったが、それに

見合う重要そうな情報を得ることもできたからどちらかといえばプラスのイベントだった。
　メイを撫でながら気にしてないと再度伝えると、バンジロウが何か決めたようでよし！と声を張った。
「お前ら今日はおいらん家泊まっていけ！」
「え…いいのか？」
「詫びってヤツだから気にすんな！じいちゃんにはおいらから言っておくから大丈夫だ！」
「そうか。ならお言葉に甘えさせてもらうよ…メイもそれでいいか？」
「…」
　こくん、と頷くもやはり俺を離そうとしない。悪い気分ではないのだけどもバンジロウの視線が気になる。
「……お前らもしかして付き合ってんのか？」
「いや兄妹だからな？」
「えっ、そうなのか…あんまり似てないな」
「…お兄ちゃんはお兄ちゃんだもん」
「あー…ブラコン、ってやつだな！」
「ち、違うもんっ！ちょっと皆よりお兄ちゃんが大事ってだけだもん……」
（それがブラコンって言うんだぞ…）
「まぁいいや…立てるか？」
「ああ…メイ、立つから退いてくれ」
「大丈夫？立てる？手伝おうか？」
「…そんなに重症でもないだろうに」
　メイの過保護っぷりに苦笑を溢しながらもその日はバンジロウの計らいによりアデクの家で一泊過ごすことに。誓いの林からでた頃には既に日暮れで星が輝き出していた時間だった。

2―2：時空の叫びと忘れ物のお届け

アデク宅での一泊は充実した一泊だった。バンジロウの思いもよらない料理スキルと家事スキルの高さに俺は驚愕し、メイが見習いたいと言うほどバンジロウの主夫っぷりがすごく、絶対コイツはモテるタイプの人間だと確信した。

それから就寝時にはなんとメイが添い寝を要求してきた。曰く「心配させた罰」だそうだが…寧ろご褒美では？とお約束を考えて承諾し、メイと添い寝した。もしこれがあの映像の後でなかったら役得といってぐっすり眠れたのだろうけど…それよりも誓いの林でみたあの映像が気掛かりになっていた。

俺と何かが別の敵性存在に追われ、メイの重要な事実が映し出されたいつかの瞬間…

あの体験はＢＷ２には無かったが、あれと似た現象をゲーム内のストーリーで起こした主人公を俺は知っている。ＢＷ２の５年前…２００７年に発売された名作揃いのポケダンシリーズでも最高のシナリオだと言われたポケモン不思議のダンジョン時の探険隊、闇の探険隊の主人公が持っていた能力。

未来、過去に関与する物体に触れた際に頭痛と共に発現し、その場で起こった未来、または過去を映し出す能力…通称、時空の叫び。

その能力を何故自分が持っているのか、またあの映像は未来のモノで間違いないのかという兄について謎だらけの状態でメイとの添い寝に素直に喜べず、しかも考えすぎて全く眠れなかった。

要するに今物凄く眠い。今ならミジュマルの子守唄でも眠れそうだ。周りが大爆笑でそうはさせないだろうけど。

「お兄ちゃん…だ、大丈夫……？」

「…もし何処かで寝てたら叩き起こしてくれ」

「わ、わかった…引き摺るね」

「……いや、叩き起せばそれでいいから」

「でもお兄ちゃんを叩くなんて出来ないよ…」

（引き摺るのはいいのか…）

「おう、起きてたか！メシできてっからはやくこいよなー！」
「あ、はーい！お兄ちゃん、肩貸そうか…？」
「…頼む」
　メイに肩を借りて、アデク宅のリビングへ向かう。その姿はまるで二日酔いの旦那を介護する嫁…いや飲んではいないのだが。
「…どした？」
「……メイとの添い寝を堪能してた」
「お、お兄ちゃん!?」
「あーハイハイごちそーさん…」
　バンジロウが手をヒラヒラとさせて呆れている。因みにメイはバラされて恥ずかしくしている。多分昨日の時点でバンジロウもやるなと気付いてたと思うけど。
「それよりも、はやく食ってくれ！冷めちまったら不味くなるからな！ほら座った座った！」
　催促されて其々適当な席に座る…メイがどこに座ったのかは言わなくても分かるだろうから割愛する。
　テーブルには朝の定番ともいえる料理が並んでいて朝から食欲を刺激するラインナップばかり。
「いただきます」
「おう！沢山食ってくれよな！」
　とりあえず目の前に置かれた料理に手をつけて口に運ぶ。美味い。昨日の夕飯でバンジロウの料理スキルは把握していたがそれでもやはり美味い。
　ふと思ったが、ポケモンの世界の夕飯で出る肉類はやはりポケモンの肉なのだろうか？ＢＷシリーズの前作、ＤＰシリーズでは食卓に関する情報がミオの図書館にあったが…そうだとしたら何だか複雑な気持ちだ。
「お兄ちゃん？食べないの？」
「…いや、食材となったポケモンの事を考えてた」
「あー…まあ、分からないことはない。だからこそ食材になったポケモンには感謝をしながら残さず異に納める。それが食べる側の役目

だと思うぞ？」
「……そうだな」
「だろ？分かったら食え食え！残したらおいらがとっちめてやるからな！」
　まさかバンジロウに食材への感謝を説かれるとはと思ったがまさにその通りだと思い、止まっていた手を再び動かす。メイもその光景を見て微笑みながら料理を口に運んでいた。

……

「「ごちそうさまでした」」
「おそまつさん！」
　数分後、用意された朝食を全て平らげ感謝の気持ちを伝える。全て平らげた事にバンジロウもニッコリだった。食器片付けを手伝っていると、朝方にも関わらずインターホンが鳴り響く。
「俺がいこう」
「いや客人にでさせるわけにはいかねーだろ…食器はシンクに置いといてくれ。おいらが出るよ」
　そう言ってバンジロウが玄関へ向かう。言われた通りに食器を運んでいるとすぐにバンジロウが戻ってきた。
「おーい、ベルってヤツがお前ら呼んでるぞ」
「ベルさんが？…また何で」
「何か渡し忘れたんだってよ。後はおいらがやっておくから行ってこいよ」
「分かった」
「ごめん、お兄ちゃん先に行ってて！」
「ああ。ゆっくりでいいからな？」
　メイの返事を背に一人で玄関へ向かう。そこにはバンジロウが言った通りベルが立っていて、何も見ていないはずなのにまた顔を手で覆って天井を仰いでいた。
「髪下ろしたメイちゃんくっそ可愛いんだろーなー…あ、やばい想像

しただけで尊い」
「…聞こえてますよ」
「え？ああ君はいいの。メイちゃんには聞こえてないならそれでよし」
「……もう俺に隠す気ないでしょ？」
「隠したところでまた疑う人に隠すメリットある？」
「ない、ですけど」
「じゃーもう良いかなって。勿論私がベルなのか、って質問にはノーコメントだけど！」
「…それ自分から怪しいって公言してるようなもんですよ。そんな人にメイを近付けるとでも？」
　警戒心むき出しにしてベルを睨み付ける。が、ベルは表情を崩すことなく笑顔のまま。その余裕綽々の表情が寝不足の状態と合わさって苛々を加速させる。
　しかし、その苛々もベルから放たれた一言で一気に掻き消える事になった。
「時空の叫び、発現したんだって？」
「……!?」
「その反応はイエスと捉えるね。どうだった？」
「…何で、時空の叫びを」
「質問を質問で返すのは感心しないなぁ…でも分かったことがあるから許してあげるね！」
「……分かったこと？」
「キミが”お兄さんであってお兄さんでない”事」
「!!」
　そこでやっと自分の犯したミスに気付く。ベルの問いについ乗ってしまって”名称を知らなくて当然な筈の”時空の叫びに反応してしまった。
「あ、大丈夫だよ？別にメイちゃんにバラそうと思ってないから！」
「…弱味を握って、言いなりにしようと？」
「もーそんなのじゃないよー！それに、私はキミの味方なんだからね

?……ま、説得力ないけど！」
「じゃあ何が目的なんですか」
「え？いやメイちゃんに渡し忘れたポケモン図鑑渡しに来ただけだけど？じゃあこれ、渡しといてね！」
　そう言って押し付けるように渡してきたポケモン図鑑。本当なら本物のポケモン図鑑に心を踊らせる所なのだろうけどもベルの見えない人物像に身構えてしまいそれどころではない。
「メイに会わないんですか」
「次のお楽しみに取っとくよ！今はキミの事も分かったからもうそれでいいかなって！」
「……貴方は、貴方は何者なんだ」
「前にも言ったよ？」
　私はベルだって。
「それじゃーね！」
　笑顔を崩すことなく自分が何者なのかを答えたベルに悪寒が走り、ベルがアデク宅を後にした瞬間張り詰めた空気に耐えられず床に座り込んでしまった。
　なぜベルが時空の叫びを知っているのか、そしてベルが敵ではないという発言にどこから時空の叫びが発現した事が漏れたのか…謎しかないベルにより一層の警戒を覚えてしまう。
「お兄ちゃんお待たせ…どうしたの？」
「……眠くなってた。それよりも、ほら」
「え、これ…って」
「ポケモン図鑑だ。渡し忘れたから渡しておいてくれとベルさんから」
「そういえば、貰ってなかったかも…じゃあ今度会ったときにはお礼を言わなきゃ！」
「……だな」
　最も次に会うときは細心の注意を払うことになるがと内心で思いながらも、大事そうにポケモン図鑑を持つメイに張り詰めた精神を和まされる俺だった。

……

「順調順調…いや順調過ぎるかな？」

アデク宅を後にし、メイちゃんのお兄さんが時空の叫びを発現したことに気を良くしながら次の目的地へ歩く。こうも上手く行ってくれたのは嬉しい事だ。

しかし不可解な事もある。時空の叫びの発動条件は〝信頼できるポケモンがそばにいる〟ということが探険隊シリーズでは絶対条件だった。

「…あ、そういうことか」

少し考えれば分かることだった。お兄さんのポケモンはお兄さんの中の人が作ったポケモンなのだから、絶対条件は普通に成立してた。いかんいかん、メイちゃんがお兄さんを心配する姿を想像してしまって思考がそっちにいってしまっていた。反省反省。

「この調子でいけば…うん、間に合いそう」

メイちゃんのお兄さんには滅茶苦茶警戒されてるけども、上手くいけばメイちゃんとお兄さんを分離させた状態に〝持っていける〟。まあ確実に敵視されるかもだけど…そこは仕方ないと割り切ろう。私の推しはあくまでもメイちゃんだし。

それにヒウンのあのイベントは〝してやられてる〟からタチワキを越えたばかりのメイちゃんでは足手まといになるし、どうしてもお兄さんと私の共同戦線が必要になってしまった。ポケモン図鑑の渡し忘れがなければどうにかできたけど、こればっかりは私のミスだし仕方ない。

うんうん、と頷いているとライブキャスターが着信を拾う。相手は…アララギ博士。

「ハーイ！ベル、図鑑は渡した？」

「勿論ですよ！…忘れたの私ですけど」

「渡せたのならそれに関しては何も言いません」

「あ、ありがとうございます…そうだ、実はヒウンシティのある区画に

ですね、イーブイが生息してるみたいなんですよ！」
「イーブイが？ベル、広い場所ではあるんだけど…そのヒウンの調査お願いできる？」
「もっちろんです！寧ろさせてください！」
「そこまで意気込んでるならお願いするわ。レポート、期待してるわね？」
「はーい！あ、でも今サンギタウンだからちょっと長くなりそうですけど……いいですか？」
「オーケー！そこは気にしないでいいわよ！」
ライブキャスターの通話が切れた。よし、これでヒウンに滞在する理由は出来たから時間に関してはクリア。
後はメイちゃん達が如何に速くヒウンに辿り着いてくれるかがキーポイントとなる。まあお兄さんがいるし大丈夫だろう…タチワキのジムリーダーはホミホミのままだし対策は容易に立てられる筈。
「はぁ…この役割、やっぱり忙しいなぁ」
でもまあ、尊いメイちゃんを見れるからいいのけど。あんなに可愛いのにアレって残酷すぎるなぁとつくづく思う。だからこそ本来居ても居なくても良かったお兄さんが此処に呼ばれた訳だけど。
「どんな活躍をするのか期待してるからね…お兄さんの中の人？」
答えられることのない期待をお兄さんに向けて私は次の仕込みをするためにヒウンへと向かう。
メイちゃんのこれからはお兄さんの先導によって決まるし、時空の叫びというチートスキルを貰えたのだから是非ともバッドエンドは回避してほしい。
正直、もうこの役割が何度目かもわからないし。

2―3：シメリイイイイップ!!（訳：俺に触れるなァ！）

「こっから道なりにいけばサンギ牧場だ」
「ああ。色々ありがとう」
「気にすんなって、礼はバトルでいいからな」
「…この旅が終わったらでいいか？」
「いつ終わるかわかんねーだろ…ま、いいけどな」
　それじゃ元気でやれよー、とバンジロウに送り出される。ベルの事は気掛かりのままだけども今は保留にして、本来の目的であるメイの戦力増強としてサンギ牧場へ向かうことに。
「メリープってどんなポケモンなの？」
「ん？ああ…そうだな、モコモコだ」
「モコモコ……」
　説明を聞いたメイが手でモコモコを表現する。その姿が可愛らしくて頬が緩んでしまい、あわてて口を隠す。
「お兄ちゃん？」
「……いや、なんでもない。因みにメリープのモコモコは静電気を帯びてるから触れると痺れるぞ」
「えっ…そうなんだ…」
　見るからに気落ちするメイ。一応ゴム手袋つければ触れないこともないが、コレじゃない感で違和感しかわかないだろう。因みに静電気がたまるとモコモコは二倍に膨れ上がり、触れただけで感電するという意外と危険な一面も。
「まぁそのあたりのケアは牧場の人がやっているだろうから、多分触れることはできると思うよ」
「ほんと？…モコモコ……！」
（分かりやすいなオイ）
「お兄ちゃん、はやくいこっ！」
「分かった分かっ…うぉっ!?」

より一層会いたいという気持ちが強くなったのか、俺の手を引いて走り出すメイ。あまりにも力強く引っ張られたのもあって変な声が出てしまった。よく千切れなかったな兄の腕。慣れてるのか？…慣れてるんだろうなぁ。

メイの怪力に耐えていた兄に同情と尊敬をしながらされるがまま、メイに引っ張られてサンギ牧場へと辿り着いた。サンギタウンについてからこんなことばっかだ。

……

「ミィッジュジュジュジュ……」

「ミジュマル、お前電気タイプ弱点だろ…」

「ミ、ジュ、ジュゥ…」

「耐える俺カッケーと思ってるかもしれないが、どっちかというとアホかって感想が出てきたぞ」

「ミジュゥ!?」

サンギ牧場につくなりいきなりミジュマルがボールから出て来てメリープ相手に突っ込んでいき、予想通りメリープの特性である静電気に引っ掛かってマヒした。

なお、メイとツタージャはというと…

「わぁ…モコモコだぁ……！」

「タジャ～…」

「？」

メリープのモコモコに癒されていた。やはりケアはしていてくれたようで触ってもそんなに痺れないメリープをつれてきて触らせてもらっていた。メリープも嫌ではないのか、モコモコに触れるメイとツタージャに首を傾げているが逃げようとはしない。

「ありがとうございます、妹の為に…」

「いいのいいの！…それよりキミのミジュマル大丈夫？大分痺れてるみたいだけど」

「いいんです。自業自得ですから」

「ミ、ジュミージュ……！」
「本人はまだやれるそうですしね…折角ですし、他のポケモンも出していいですか？」
「勿論！」
「ありがとうございます…皆、出番だぞ！」
連れてきたポケモン達が入ったボールを投げて相棒達を呼び出した。グレイシア以外は確認してなかったし、その確認も兼ねての顔合わせ。
「グルルゥ」
「きゅー！」
「クエエエエエ!!!!」
（ウォーグルだけうるせぇ！）
眠そうに欠伸をするガブリアスと出てきた瞬間俺の脛をすりすりするグレイシアにやたら雄叫びがうるさいウォーグル…ウォーグルだけやけにクセが強い。
で、やっぱりミジュマルは俺のポケモンに反応してガブリアスに攻撃を仕掛けるが、ガブリアスはというと「グルゥ？」と「何してんだコイツ」という感じで全くダメージを感じていなかった。
「きゅーん？」
「ああ、新しい仲間のミジュマルだ」
「グルルっ！」
「ミジュゥ……！」
「クエッ、クエエェ!!!!」
「ウォーグル、少しボリューム下げてくれ……メリープが怯えてる」
「クエッ」
ゲームの性格と全く違うウォーグルは兎も角、ガブリアスとグレイシアは変な点がなくて良かった。これならミジュマルとも仲良くやれそうだ…ミジュマルが決闘を挑まなければ、だけど。
ミジュマルの攻撃をじゃれあいと勘違いして遊んでるガブリアスに苦笑していると、サンギ牧場のブリーダーが頭を抱えながら此方へやってくる。

「うーん、おかしいな……」
「どうかしたんですか？」
「あ、いやね…メリープの数が足りないんだ」
「数が足りない…？何頭足りないんですか？」
「うーん、二頭ほどかな…」
　そして予想通りここでＢＷ２初のプラズマ団残党との遭遇イベントが開始された。メリープの数が一頭多いのは気にしないでおくとして、ここでこなしておく手はないので捜索の手伝いを申し出る。
「分かりました、俺が探してきますよ」
「え、いいのかい？」
「ええ。触れあわせてもらってるお礼です」
「助かるよ、ありがとう！もしかしたら数え間違いかもしれないから此方でももう一度数えておくよ」
「了解です。ウォーグル、上空から牧場内のはぐれたメリープを捜索してくれ」
「クェッ」
　指示を出した途端物凄い速さで上昇していったウォーグル。あまりの速さに一瞬呆気に取られてしまったが、気を取り直して残りのポケモンに指示を送る。
「ガブリアス、グレイシアは俺と一緒に」
「グルゥ！」
「きゅっ！」
「ミジュマルはメイの護衛を頼む」
「ミジュゥ…！」
「よし、行くか……！」
　それぞれに役割を告げて行動を開始する。プラズマ団もきっと容赦のない組織になっていると予想してメイは人目のつく場所に置いていくことに。
　場所はサンギ牧場の林の中であることは間違いないので迷わず林の中へ向かう。
（やっぱり視界が悪いか…）

ゲームとは視点が違うからというのもあるが、やはり薄暗く感じる。まだ昼前だというのにこの暗さだと誰も寄り付こうとしないだろう。そりゃプラズマ団も迷うわけだと勝手に納得する。
声を出して探すのが一番なのだろうけど、迷子ではなく盗まれたポケモンだから下手に声を出して潜伏位置を変えられたらたまったもんじゃないので草木を掻き分けながら静かに探す。
(しかし二頭だったっけ…盗まれたのって。まさか両手に抱えてここまで逃げてきたとか?)
だとしたら相当シュールな図だ。黒服が両脇にメリープ抱えて林へ走る姿……なんかプラズマ団のイメージでマヌケっぽい姿を想像してしまって笑いそうになり、ぐっと堪えていると空からウォーグルが降り立ってくる。
「ウォーグル、見つかったのか?」
「クェ!」
肯定するように一鳴きするウォーグル。案内してくれと頼むと頷いて再び俺にも見えやすいように空を飛び、メリープのいる場所へと誘導してくれた。

……

「モコモコ……あれ?」
メリープに夢中になっていたらお兄ちゃんの姿を見失っていた。何処だろうと探していると、お兄ちゃんのミジュマルがやって来てツタージャとじゃれあう。
「ミジュマル、お兄ちゃんは?」
「ミジュ…?ミジュ、ミージュ…」
「…えっと、気にするなってこと?」
「ミジュ」
「ターッ!タジャーッ!」
「ミッジュッジュゥ……!」
「ふふ、もう…仲良いんだか悪いんだか」

そういえば、と思い出す。小さい頃にも一度、お兄ちゃんと遊んでいたときに私がお兄ちゃんを驚かそうと隠れていたら寝ちゃって、起きた時にはもう夜で…寂しくなった私はその場で泣いちゃってで…その時はお兄ちゃんのウォーグルが私を見つけてくれたのか、お兄ちゃんとお兄ちゃんのポケモンがやって来て迎えに来てくれたっけ。
（懐かしいな…）
そう、あんな風にウォーグルが飛んで…え？
「あれ…お兄ちゃんのウォーグル……？」
サンギ牧場の林を旋回しているウォーグル。お兄ちゃんが教えてくれた通りならば、この周辺にはウォーグルは生息していない筈だから、あのウォーグルは多分お兄ちゃんのウォーグルだ。
「（何であんなところに…）ツタージャ？」
「タジャーッ！」
「ミジュ!!」
「ンメリィィィィップ!!!」
「ミィッジュジュジュジュ!!!?」
「え、えっと…お兄ちゃんを探しにいこっか？」
「タジャッ！」
怒ったメリープに気絶させられたミジュマルを牧場の管理人さんに預け、ウォーグルを目印に私とツタージャはサンギ牧場の林へ足を踏み入れた。同じ場所をずっとぐるぐるしてるから多分お兄ちゃんはあそこにいる筈。

……

ウォーグルの指示する場所へ向かうと、ゲームのシナリオ通りメリープと盗んだ犯人……プラズマ団の残党がいた。二匹いるということはやはり両脇に挟む感じで盗み出したのだろうかと思い、つい吹き出してしまった。
それで場所が割れてしまい、俺のいる方向を振り向く。
「み、見つけたぞメリープ泥棒…くくっ」

「何で笑ってんだよ!?」
「いや…すまない。仕事を笑うのはダメだと分かっているのだが……アンタがどうやってここまで来たかを考えると我慢できなくて…な」
「いやしょーがねーだろ!?大体持つだけで痺れるってなんだよ！ケアはちゃんとしろっての!!」
「いや、ケアする前に盗み出したのでは…」
「……」
「……」
「メエ？」
　考えたらわかる指摘に黙るプラズマ団とそれにつられて黙る俺。被害ポケモンのメリープは首を傾げる。
「バレては仕方ない！お前には悪いが忘れてもらうぜ！プラーズマー!!」
「（はぐらかした…）メリープは返してもらう。なんの恨みもないが…倒させてもらう！」
　仕切り直しを図ったプラズマ団に乗って此方も何事も無かったかのように話を進めて交戦の構えを取るが、後ろからも人の気配を感じ、振り向くとそこには二人目のプラズマ団残党が俺の逃げ場を塞ぐように立っていた。
「加勢するぜ！」
「なっ、二人!?」
「一人だって誰もいってねーだろ！」
「挟み撃ちだ、覚悟しろよ…!?」
（やっぱり二頭を一人はキツかったのか…まあ二人なら何とか対処はできるか…！）
「だったら、此方も二人だよ！」
「「は？」」
　聞こえる筈のない四人目の声にプラズマ団と声を合わせてしまう。声の先にはツタージャを肩に乗せたメイが仁王立ちでプラズマ団その２の背後にたっていた。
「メイ!?ミジュマルはどうした!?」

「えっと…メリープに気絶させられたから、管理人さんに預けてきたよ」
「あんの無鉄砲…」
　管理人の所で延びているであろうミジュマルに呆れてものも言えなくなる。やはりミジュマルにはまだ荷が重かったようだ。メイが此方へ来たのは誤算だが不幸中の幸いで２対２…ならやることはひとつだった。
「メイ、俺は目の前の男を倒すからお前はそいつの相手を……できるか？」
「大丈夫、やれるよ！」
「…なら、任せるぞ！」
「うん!!」
「子供であろうと容赦はしない！プラーズマー!!」
　誤算から生じた兄妹で初めてのタッグバトルの幕が今開こうとしていた。そしてこのバトルを経て、俺は改めて知ることになる。
　メイがキーパーソンと呼ばれた理由、その末端を。

……一方その頃、ミジュマルは……

「ミィッジュジュ……」
「電気タイプに挑む勇気は認めるけど、ちゃんと相手は選ばないといけないよ？」
　サンギ牧場の管理人から麻痺直しと傷薬の治療を受けていたそうだ。尚俺が戻るまで本来の役目をすっぽかして何度も何度もメリープにケンカを売っていた事を引き取った時に教えられることを、俺はその時知るよしもなかった。

2―4：憤怒と無理ゲーのｖｓＬｖ１００

其々がボールからポケモンを呼び出す。メイは肩に乗せたツタージャを、そしてプラズマ団の両名はチョロネコを……そして俺はグレイシアを。

「いやまてまてまてまて!!」

「…何か？」

「いや何か？じゃねーよ!?明らかに格が違うだろそのグレイシア!?」

「お、おかしい…この付近のやつは皆そこまで強くないとボスから聞いていた筈なのにアイツだけ別次元だぞ…!?」

「ふふん、お兄ちゃんは最強なんだから！」

（…同レベルに合わせたとはいえ、お前はその最強を打ち負かしてるんだけどな）

胸を張ってドヤるメイにひきつった笑いを向ける。プラズマ団は俺がチートクラスのトレーナーと分かったという事もあってやっちまったと頭を抱えているが、生憎手加減するほど甘くはない。

「格下をいたぶるのは趣味じゃない…だから一瞬でお前のチョロネコを仕留めよう。できるなグレイシア？」

「きゅ！きゅー！」

余裕、と俺に伝えたいのか元気良く返事をするグレイシア。折角だから少しテクニカルに倒してみるとしよう。ゲームとちがってちゃんと範囲を指定できるし、攻撃技でも使い方ってモノがある。うまく活用すればアニメのポケモントレーナー達の様に技と技を組み合わせたコンボを編み出せるかもしれない。

物は試し。早速やってみよう。

「そんな簡単にやられるかよ！チョロネコ、動き回って攻撃をかわしまくれ！」

「ニャ！」

（…それ愚作じゃね）

確かに攻撃に当たらないつもりならそれもありだけど、此方が耐久したらバテて動きが鈍った所を突かれるのが関の山だと思うが決し

て口には出さない。
　勿論耐久をするつもりもないので、相手がそれに気付く事もないだろうけど。
「グレイシア、地面を吹雪で凍らせろ」
「きゅー…ぅうっ！」
　グレイシアの口から吐き出される吹雪でチョロネコが走り回るフィールドが凍りつく。ついでにプラズマ団の足下も凍りついたが、まぁよしとしよう。どうせそんな状況でも逃げるんだろうし。
　フィールドが凍りついたチョロネコはうまくコントロールを取れずにわたわたと慌てながら凍った足場に滑らされている…またとないチャンスだった。
「グレイシア、〝左斜め方向に〟氷の礫」
「きゅ…！」
「何いってんだ！チョロネコはそんなところにいないぞ？強いのはポケモンだけってか！」
「当たるさ」
「いや当たるわけ…「ニャオ!?」何イ!?」
　氷の礫に被弾したチョロネコがそれだけで目を回す。
　偏差撃ち。対人戦闘ゲーム…それもポケモンではなく、ＦＰＳ（本人視点）やＴＰＳ（第三者視点）のシューティングゲームで主によく使われるテクニックの一種。
　ＣＰＵや敵プレイヤーの移動位置を予測し、そこに攻撃を仕掛けるのが偏差撃ち。勿論ポケモンでもこのテクニックは使用可能で、対戦で相手の行動を予測して技を選択する…通称置き〇〇の方が親しみがあるだろうか。
　例題を挙げるなら…シングル対戦で初手対面の有利を取り、相手がポケモンを変えると予想して交代先に負担を与えるといった所。無論相手もＣＰＵではないので、それも読んでいるのが殆ど。まぁ、それがまた醍醐味と言えるのだけど。
「チョロネコ？おいチョロネコ？」
「にゃ～……」

「い、一撃かよ……氷の礫って威力４０だろ…」
「レベル差だな」
「ぐ、ぐぅぅぅ…！だがしかーし！俺には相棒がいるのさ！なぁ相棒！」
「おう！そっちはやられたみてーだけど此方は勝てそうだぜ！」
プラズマ団その２の余裕そうな声に振り向くと、押され気味のツタージャとまだまだやれるといったチョロネコ。俺とプラズマ団の立場を全く逆にした試合展開がされていた。
メイはというと苛立っているのか、苦虫を噛み潰した表情でプラズマ団を睨み付けている。
「……っ！」
「メイ、手を貸「いいっ!!」いやでも…」
「いいっ！この人は、私が倒す…!!倒すからっ!!絶対に…ここでっ!!」
（メイ…？）
さっきまでの余裕さはなく、焦りを見せているのか語尾が荒い。状況的にも当然かと思ったが…それでもメイへの違和感は拭えない。
見たままでいえば…”怒りすぎ”なのだ。プラズマ団が煽った様子もなければツタージャのパフォーマンスも悪くない。自分に対しての怒りにしては行き過ぎている。
単純なレベル差の結果だと思うが、フォローとして声をかけても今のメイには耳障りでしかないだろう。
「……なぁ、お前の彼女怒りすぎじゃね？」
「妹だ…確かに少し感情的になりすぎている線があるなって、何馴れ馴れしく話しかけてるんだお前は…」
「負けたからな、やることねーんだよ」
「…今の内に逃げればいいだろ」
「逃がさないだろ？」
「当たり前だ」
多分俺に話しかけなければ逃げれたかもしれないがと思ったがプラズマ団にもプラズマ団なりの仁義というものがあるのだろうか。もしそうなら少しは見直し…

「あ、お前に話しかけなければ逃げれたわ」
「……気付いたところで、だぞ」
「だよなー」
前言撤回。逃げれるなら仁義もへったくれもない集団にかわりなかった。絶対に逃がさないからなお前。

……

お兄ちゃんは何の苦もなく一瞬で怪しい二人組の一人を倒した。お兄ちゃんに逆らうからそうなるんだと同情はしない。恨むならお兄ちゃんに挑んだ自分を恨めと辛辣な思いをぶつけていた。
「ツタージャ！」
「タジャ！」
「見てから回避余裕でしたー！チョロネコ！」
「ニャー！」
それに比べて私は苦戦している。さっきから当てようとしてるのに当たらない。悉く回避されて段々と苛立ちが募っていき、頭に血が昇ってゆくのが分かる。
何で当たらないの？どうして当てれないの？と黒い感情が沸々と沸いてでる。悪いのは私なのに。
「……っ！（当たらない、何で!?）」
「メイ、手を貸「いいっ!!」いやでも…」
「いいっ!!この人は、私が倒す…!!倒すからっ!!絶対に……っ!!」
お兄ちゃんは心配してくれたのに自分でもみっともないと思うほど感情的になって、その心配をはね除けた。
お兄ちゃんとのバトルではそんな事なかったのに、なんでこの人と戦うってなった途端無性に倒さないとって使命感に駆られたのだろう。
――英雄だから
（…違う）
――違わない。私は英雄の…だ

（違う……！）
――何が違う？知っているだろう？
（知らない、何も知らない…!!）
――お前は、もう……なのだから。
「つだまれぇぇぇっ!!!!」
「!?」
「タジャ!?」
「メイ!?…くっ、グレイシア！氷の礫でチョロネコを「邪魔をするなっ！ツタージャ、グラスミキサーでグレイシアの視界を奪って!!」なっ!?」
「タ、タジャ!?」
「はやくっ！」
やむを得ずでグラスミキサーを放つツタージャ、当てる気が無かったのか、グレイシアに被弾はしなかった。どうして当てようとしないの？当てろって指示なのに！
目の前の全てが邪魔だ。誰も私を見ていない。
ああそうだ、邪魔で邪魔で仕方ない!!閉じ込めたあの連中も！利用したコイツらも！英雄の影を重ねた奴も全て全て全て全て!!だからここで数を減らす！私という安寧を得るために!!

……

「な、なんだなんだぁ!?」
「わからねぇ！と、とりあえずやべぇから逃げるぞ！」
「逃げるって、メリープは!?」
「知るか！このままだと俺ら瞬殺だぞ！」
「だ、だな！一目散ににげろぉぉぉぉぉ!!!!」
メイに畏怖したプラズマ団が逃げだした。追いかけたいところだが、怒りの表情で此方を睨むメイに背中を向ける訳にもいかなかった。
それに背後のメリープも怯えているのか俺にすり寄って安心しよ

うとしている。
（怒り狂ってるのか…いや、それでもおかしい）
怒りようが尋常ではない。まるで全く関係のない事で怒り狂ってる様にも見える。兎も角この状態のメイを離脱させるわけにもいかないのが現状。
「（メイには悪いが…）グレイシア、応戦するぞ」
「きゅ…？」
「ああ。但しツタージャには攻撃しない。最小限のダメージでメイを気絶させる…できるか？」
「きゅ……!!」
「よし…頼むぞ、グレイシア！」
「きゅー！」
「お前も、私を閉じ込めるのか!!あの箱に!!」
（お前!?急に言葉遣いが荒くなったな!?）
「タジャ！タジャー！」
ツタージャが必死にメイを呼ぶが届かない。というよりもメイが”自分の名前を認識していない”様に見える。
出会ってまだ2日だけどあれほど大事にしてたツタージャに見向きもしなければ、好きな兄である俺を睨み続けるメイはメイじゃない、そんな気がした。
「グレイシア、威力最小のシャドーボール！」
「きゅー！」
「……！」
「タジャ…っ!?」
「きゅうっ!?」
「な…っ!?」
当たる直前、メイは足下にいたツタージャを引っ張りあげて威力最小とはいえグレイシアのシャドーボールをツタージャの身体に直撃させた。
威力最小なのが幸いだったか、ツタージャにはそれほどのダメージが無かった。寧ろそれよりも主人に肉壁として利用されたショック

の方が大きいだろう。メイの行為に怒りの感情が初めて沸いてくる。
「…メイ、お前……！」
「……当ぜ、っぐぅっ!?」
昨日の俺のように突然頭を抑え込むメイ。直ぐに駆け寄りメイの名前を呼ぶが反応することなくそのまま気絶してしまった。怒り狂ったメイが倒れた事により、辺りが再び静寂に包まれる。
「……何だったんだ、今の」
「きゅー…」
「ツタージャ、大丈夫か？」
「…タジャ」
「…すまなかった。兄として謝る」
「タジャ、タジャー」
気にしてない。と言わんばかりにてしてし脛を叩くツタージャ。もしかするとこの子も気付いていたのかもしれないと思いながらも当てたお詫びとして捜索中に見つけたきのみをツタージャにあげた。
（…とりあえず、戻らないとな）
メイの豹変も気掛かりではあるが、今は保護したメリープを送り届けるためにもサンギ牧場へ戻ることに。
後にこのメイの一時的な豹変が物語の大きな鍵となることを知ったのは、この時よりも大分先の話だ。

2―5：膝枕役は男女逆でもオイシイ

変な夢をみた。お兄ちゃんが私を倒そうとする夢。
仕方ない、ごめんなさい、助けてやれなかったとお兄ちゃんは私に懺悔するように語りかけてた。
どうして？私はどこも悪くないよ？お兄ちゃんはメイに何もしていないよ？と言っても、お兄ちゃんは涙目になりながらもガブリアスを差し向け…それで……。
私の身体を、ガブリアスが斬り裂いた。

……

「っ、っ!?」
「メイ？」
「ふぇ…？お、お兄ちゃ……っ!?」
「…真っ赤だぞ、大丈夫か？」
飛び上がるように上体を起こしたら目の前にお兄ちゃんの顔がものすごく近くに。起きていきなりお兄ちゃんの顔をみれたのは幸せだけど、流石に近すぎるよ…！
…あれ？私ここで寝てなかったよね？確かえっと…お兄ちゃんを探しにサンギ牧場の奥に向かって、お兄ちゃんと一緒に怪しい二人と戦って…どうなったんだっけ。
「お兄ちゃん、あの怪しい人達は？」
「……覚えてないのか？」
「うん」
「…俺のミスで取り逃がした。メリープは取り返したからそれで帳消しにはなったから結果オーライだな」
「えっ、逃げられちゃったの？珍しいね…お兄ちゃんから逃げ切れるって…」
「ああ。入り組んでたからうまく地形を利用された」
そういえば入り組んでたなぁ。私もウォーグルの案内がなければ

多分今頃迷っていただろうし、お兄ちゃんに余計な負担をかけてしまう。それは避けたい。
（…あれ、何か違和感が）
　お兄ちゃんの座ってる位置が私が振り向かないと顔が見えない位置で何かおかしい…あれ？そういえば寝てたけど芝生にしてはかなりガッチリした感じだったような…
（え？あ、あれ…も、もしかして）
　そこでお兄ちゃんが私にしていたことに気付き、確認ということで恐る恐るお兄ちゃんに何をしていたかを聞く。
「ん？…膝枕だけど」
「ひ、膝枕…!?」
「まぁ、男の膝枕だから固かったのは許してく「ゆ、許すよっ!?お兄ちゃんの膝枕だもんっ!!」…そ、そうか…それならまあ、よかった……のか？」
（お兄ちゃんの膝枕…っ、もっと堪能すればよかったぁ…！いや、今からでも遅くないよね！）
「……メイ？」
「あ、え、えっと！私、まだ少し眠たいからもう一度お兄ちゃんに膝枕してほしいなーって…ダメ？」
「いや、別に構わないが…眠そうじゃな「ありがとうお兄ちゃん！おやすみっ！」……おやすみ」
　無理矢理お兄ちゃんの疑問を遮って再びお兄ちゃんの膝枕を堪能する…はぁ……幸せだなぁ。
（お兄ちゃんの筋肉…がちがち……）
　小さい頃にもして貰ったけど、あの頃と比べるとやっぱり筋肉がついて男の人らしい身体になってるんだと思うと、顔が熱くなってくる。
　真っ赤なのに気付いたのか、お兄ちゃんが「大丈夫か？」と心配の声を掛けてくれ、返答の代わりにこくんと頷いて意思を示す。
「……」
　ふにっ。

（ひゃっ!?）
「……柔らかいな、当たり前か」
（お、おおおお兄ちゃん!!?）
　びろーん。
（ひゃわわわわ……!!）
「…結構伸びる」
　ふにふに。
（お兄ちゃん…ど、どうしたの～～!?）
「……癒されるな、うん」

……

　メイが寝たと信じて、会ったときから触ってみたかったメイの頬を触ってみた。思った通り柔らかくて意外に伸びる。やさしめに引っ張ったつもりだから赤く晴れ上がってはいない筈…よし、大丈夫だな。
（…さっきまでブチギレてたとは到底思えないな）
　あれがメイ本人の感情であると決まったわけではないが、それでもメイの根底には”メイも記憶していない何か”が潜んでいることが分かった。
　もし、俺はその”何か”を鎮める為の鎮静剤として呼ばれたのなら、この旅の目的が決まったも同然なのだが…問題が山積みなのでそうだと断定できない。
（しかも、その何かが分からないから尚更なんだよなぁ…メイも知らないからメイではないと思うけど）
　分かっている事と言えば３つ位。
　１つ目は、プラズマ団に対しての憎悪。
　２つ目は、人間に対しての猛烈な敵対心と怒り。
　そして３つ目は……ポケモンを単なる”防御装置”としか思っていない残虐性。もしかしたらポケモンだけでなく、生命体全てが該当

するかもしれないが、あのポケモンへの喜びを顕著にしていたメイが何の躊躇いもなくツタージャを盾にした事が何よりも驚愕だった。
もしかすると、この先でメイがその何かに乗っ取られるシナリオが組まれているのなら…と思うとゾッとする。
これからメイが出会うだろうポケモン達が何かに防御のために使われるとなったら、取り返しがつかなくなってしまいそうだ。
（…流石にまずいよな）
「……」
（でも、だからといって…メイとポケモンを遠ざけるのはダメだ。何のための旅なのか分からなくなる）
「…お兄、ちゃん……」
「ん……？」
「…だいすき…えへへ……」
（…寝言、だよな？）
寝言でも兄に想いを伝えるメイに兄自身はどう思っていたのだろうか。やはり兄も兄でメイの事を一人の女性として扱っていたとしたら…こればっかりはもう救いようがない。俺としてはどうせクリアしたら戻されるだろうから別に構わないが…兄の将来を決めてもいいのかと良心が働く。
もしも、この先ジムリーダー枠としてホミカにフウロやカミツレといった女性や変化球でモブトレーナーとフラグが立つ予定だったのならと考えると……
考えると……無性に腹が立った。
（まいっか。どうせ添い遂げるの俺じゃないし……精々苦労するがいいさメイの兄め！ふぁっきん！）
という訳でメイとのフラグ立てを容赦なく行うことに。勘違いされると困るので弁明するが俺はＢＷ２で一番の推しはメイだ。次点でルリ。某掲示板のツンデレメイとヤンデレルリのＳＳは個人的に大好きだった。キョウヘイ氏ねと思ったが。
…話が脱線した。返答に間が開くと違和感を感じてしまうので今の内にメイの寝言に答える。

「…俺も、好きだぞ」
「……!!」
耳元で囁くように呟く。メイの兄が持つイケメンボイスが最大限に発揮された瞬間だろう。まぁ寝てるから聞き流されてると思うけど。
（…はー、俺もこういう妹欲しかったなー）
お兄ちゃん想いで美少女な上にプロポーションの値も高いとか最高かよ…何でもっとハッスルしなかったんだ家の親はと今は別世界にいる本当の両親へ愚痴る。
如何せん一人っ子だから兄妹というもの自体が羨望の眼差しの対象だったし、しかもギャルゲやエロゲみたいに妹が兄を一人の男性としてみてるのだから尚の事羨ましい。挙げ句の果てにはポケモンが強い。まぁこれに関しては俺が作ったポケモンだけど。
「…はぁ」
恵まれ過ぎてるメイの兄と比べて無性に虚しくなった俺は空を仰ぎ見ながら溜め息を吐くのであった。

……

寝言と偽ってお兄ちゃんに好きっていったらお兄ちゃんからも好きと返ってきた。しかも耳元で囁くように言ってきたのでその瞬間私の心臓が激しく脈打ち、お兄ちゃんに真偽を問い質したくなる。
（お兄ちゃんも、私が好きって……！）
寝ているフリを続けているが、正直にやけてしまいそうで怖い。もういっそのこと開き直って「嬉しい！お兄ちゃんと両思いだったんだねっ！」と言って起き上がって抱き締めたいけど…それをする勇気がない。
もしそれが”兄妹として”なら恥ずかしい所の騒ぎじゃなくなるし、これからの旅がとても気まずくなる。
それに…もしそうだったとして拒まれたら……きっとお兄ちゃんといるだけで辛くなってしまう。

寧ろ今みたいな兄妹愛と勘違いされている今の環境が一番いいのかもしれないとも思えてくる。勿論其処止まりじゃ私は絶対に嫌だ。

でも…言ってしまったらこの関係が壊れてしまうかもしれないのが途方もなく怖い。

(好きって分かっただけでも…いい、よね)

”想いを聞いた先”を恐れた私は、お兄ちゃんに聞くことができないまま寝たフリを続けてしまうのでした。

2―6：俺氏、初のガチバトル

溜め息をついてから暫くして…足が痺れ感覚が麻痺してきた頃にメイがやっと起きた。

おきた頃には既に日が暮れ始めていたので今日の宿はどうしようかと二人で相談していたら、メリープを取り戻してくれたお礼として牧場の管理人さんがサンギ牧場のペンションをなんと無償で一晩貸してくれるという提案をしてくれた。その上報酬金として大体お坊っちゃまトレーナー五人分くらいの金額まで。

流石にこれは気が引けたが、メリープが帰ってきた事に比べると全く苦にはならないと言われ、それでもと引き下がらない俺に半ば押し付ける形で渡してくれた。

「大金貰っちゃったね…」

「ああ。人のこと言えない気もするが、彼処まで頑固だとは思わなかった…」

「それほどメリープが大事なんだね、管理人さん」

「だな…じゃなきゃ宿の無償提供に報酬金もプラスとか絶対に考えられない」

ともあれ、貰ったからには旅の資金として有効活用させてもらおう……そういえば、俺のゲームに記録されていたおこづかいはどうなってるのだろうか。確かボール補充にしか使っていなかったから相当額あった筈。

……今思うと、十代前半の子供が数百万もの大金を持ち歩いてるって中々危ない気が。というか盗まれてもおかしくないし、ＨＧＳＳのお母さんにお金を預かってもらうシステムって割と画期的だったのではと気付く。預けてるお金を勝手に使われるのは別として。

（ヒオウギに戻ったら確認だな…）

やるべき事が増え、ついでにその時にでもトレーナーカードの所在を訊ねようと決めたところでその日を終える。就寝時にまたメイが添い寝を所望したが流石に二日連続は俺の理性の問題で無理だと判断したので一緒の部屋で寝ることだけを承認した。

……

翌日、やはりメイは俺の布団に侵入していた。おかげで朝から冷や汗を流すことになった。一応どちらも服を着ていたので既成事実は起きていないようだ。

安堵したところでメイを起こして、朝食を済ませているとペンションの戸を叩く音が。朝からなんだと思いながら戸を開けると、そこにいたのはバンジロウだった。

「…どうした、こんな朝から」

「起きてたな、んじゃバトルしろ！」

「いや…旅が終わったらと約束しただろう」

呆れながらやらない意思を伝えると「いつか分からんしその時お前忘れてるだろ」と最もな意見を俺にぶつけ、確かにそれもそうかと自分で納得してしまった。

「だからよー、じいちゃんに挑む前においらと戦え！もし勝ったらじいちゃんの情報教えるぜ？」

「む…」

それは欲しい。一番目のジムリーダーとなったアデクが駆使するのは何タイプなのか。それを知っているだけでもアドバンテージを取れるし、メイにもそれを共有してやることで攻略の糸口を見つけ出してもらえる。報酬としては申し分ないどころか、寧ろありがたいのでバンジロウの申し出を断る理由はなかった。

「…分かった。そのバトル受けよう」

「っしゃあ！んじゃ早速表でやろうぜ！」

「許可は取ってるのか？」

「ったりめぇよ！」

朝から眩しいくらいの笑顔でサムズアップを見せるバンジロウに準備すると伝えて寝室に戻り、俺のレギュラーメンバーの入ったボールを腰のホルダーにつける。

途中メイが様子を見てどうしたのかと訊ねてきたので玄関での内

容を伝えると頑張ってと応援してくれた。それを見てメイは挑まないのかな?と思ったが、自分の実力を把握しているからこそ敢えて送り出す選択をしたのだろうと自己解釈して尚更負けられないとやる気を出す。
「待たせたな」
「気にしてねぇから大丈夫だ!」
「対戦のルールは?」
「んー…６３５０見せ合いなしで」
「了解」
バンジロウとルールを確認し、承認。彼の口から６３５０というワードが出たのは驚いたが、ルールの意味は分かっているようなので気にしない。
６３５０というのはシングルバトルの”６体から3体選出し、レベル５０フラットで戦う”という意味で数字を取って６３５０と略され、所謂廃人用語の一つだ。大体この数字だとシングルルールに相当されるので両者ともに意味がわかっているとそれだけで選出に入る。
(…見せ合いなしで助かったなホント。此方は６３５０じゃなくて４３５０だし一体は技のバリエーションの問題で使うわけにもいかないので実質固定だったから対策を取られずに済む)
対して此方はバンジロウの手持ち5体は把握済み。内４体はグレイシアとの相性が最悪で此方の有利がとれる。唯一タイプ負けするウルガモスもガブリアスかウォーグルで対応可能。実質勝ちと考えてもいいが…あくまでもこれは”ゲームの”バンジロウが持っていたポケモン。
此方のバンジロウが全く同じとは考えづらいが、出すポケモンが固定な以上賭けるしかない。
(先発グレイシア、次点ウォーグル、抑えガブリアスだな…グレイシアでどこまで削れるかが勝利のカギだ)
「そっちは準備できたかー?」
「何時でも構わない!」
「おっしゃ、じゃあやるか!」

「…勝つ！」
「それは…おいらの台詞だ！」
　お互いにボールを投げ合い、青空の下で試合が始まる。バンジロウが出したのはガブリアス。対面としては最高の対面状況を作り出せた。
　威嚇するガブリアスに負けじと対抗するグレイシア。その後ろで初手をどうするかを考える。
（初手対面は此方がイチニアシブ取れたが、間違いなくバンジロウは交代するだろうな…妥当な点でいけばウルガモス安定だが…此方がそれを読んでいると考えて敢えて居残り剣の舞でも積まれたら一貫の終わりだ。次ターンでバカみたいな逆鱗をぶちかまされて終わる！……イチバチで居残り吹雪だな）
（対面最悪だなオイ！ここは変えるべきか？……いや、多分アイツ交代読みで交代を考えてるかもしれねえ。ここは博打打って剣の舞を指示……ダメだ！グレイシアの吹雪一発で落ちるリスクを考えるとここでガブリアスを失うのはでかすぎる。かといって後ろのウルガモスを出せば有利は取れるが…仕方ない、これでいくか…！）
「グレイシア、吹雪！」
「ガブリアス交代！カイリュー！」
（ガモスじゃなくてカイリューかよ…！対面不利なのにコイツ出したってことはガモスはゲーム通り襷持ちってことか？まぁカイリューは落とせるからよしとするか…！）
　入れ替えで現れたカイリューがグレイシアの吹雪を受け止める。相性の関係でダメージ効果四倍で本来なら一撃余裕だがギリギリで耐えられた。予想はできていたがいざ落とせなかったらそれはそれで悔しい。
　カイリューの特性である”マルチスケイル”は体力満タンの時にダメージを受けると一度だけそのダメージを半減するもの。当時対戦にてマルチスケイルのカイリューがよくでたという事でプレイヤーからは「マルスケデブ」という愛称とも蔑称とも取られる呼び名で知れ渡った。因みにこの特性を持つのはカイリューとルギアだけ

という割とレアな特性でもある。
　それはそうとこのカイリュー、四倍タイプ一致の吹雪を耐えたということはそこまで攻撃力は高くないとみた。
（あっぶねぇ…居残り剣の舞してたら落とされてた！カイリューいれといて正解だったな…耐えたのは想定外だけど、多分アイツのグレイシア先制技積んでてもおかしくねぇ…カイリューには悪いがここまでか。死に出しでウルガ……いや、ガブリアスだな）
（カイリュー耐えるのかよ…まぁ氷の礫で落とせそうだから遠慮なく落とさせてもらおう。多分バンジロウも死に出しガモスを予定してんだろ）
「グレイシア、氷の礫！」
「きゅうっ！」
「リュ…ゥ！」
　グレイシアの先制で倒れるカイリュー。これで3―2の相手サイクルは崩せたけども、バンジロウは敢えてそれを選択したのだろう。とすれば相手はカイリューがいなくともガブリアスとウルガモスで突破できる要素はあるという事かと解釈し、より気が引き締まる。
　カイリューを戻して次のポケモンを出すバンジロウ。繰り出したのは…ウルガモスではなく、グレイシアとは対面不利なガブリアス。
（ガブリアス出してくるのかよ!?ってことは、ガモスで3タテする気か試合を諦めたか……まあバンジロウの性格を考えると間違いなく前者だろなコイツ…そういうことなら遠慮なく落とさせてもらおうじゃないか）
（さて、ガブリアスを出したから間違いなくアイツはグレイシアで落とそうと考えてる…そこにカウンターを入れてやる！…というかよく考えたらガブリアスならグレイシアの上とれるんじゃ……朝だから頭回ってねえんだろうなぁ…）
「グレイシア、吹雪！」
「きゅあー!!」
「ぐぁる…ゥ!!」
（倒れない!?ってことは……襷か!?）

「ストーンエッジ！」
「グルォォッ!!」
「きゅぅうっ!!」
「グレイシアッ!!」
落ちるはずのガブリアスが「気合いの襷」の効果で落ちず、カウンターのストーンエッジがグレイシアを撃ち上げる。タイプ不一致とはいえガチポケ筆頭のガブリアスが繰り出す技は殆ど即死級。確りと捉えられた一撃はグレイシアの意識刈り取るには十分すぎる一撃だった。
「きゅー……」
「戻ってくれグレイシア…頼むぞ、ウォーグル！」
「クゥオエアァァァァァァァ!!!」
「グルォォアァァァァッ!!」
(うるせえ！)
(対抗しなくていい！)
威嚇なのかグレイシアを倒したことへの怒りなのか出てくるなり喧しく叫ぶウォーグルと対抗するガブリアス。此処が住宅街とかじゃなくて良かったと心底思った。
(ウォーグルはなにも考えずにタイプ一致ブレイブバードでいいな。今ならそのまま持っていける…！)
(十中八九ブレイブバードが飛んでくるな。といってもこのままやられるつもりもない！ガブリアス、お前もそうだよな！)
「ブレイブバード!!」
「クゥオエェエエエエエイ!!」
やっぱり喧しく鳴きながら十八番のブレイブバードでガブリアスに向かっていくウォーグル。ガブリアスの体力はほぼゼロ。反動も最小限に抑えた状態でウルガモスとの対面を迎えることに内心安堵していた…が、その考えは甘いと思い知らされる。
あくまでも想定した状況は〝ゲームのルールなら〟そうなるもので〝ゲームじゃない〟この世界では、そのルールは通用しないとバンジロウの指示で知る。

「死なば諸とも！受け止めてストーンエッジ！」
「何だと!?」
「グル…ァアッ!!!」
「クォエッシャァ!?」
「ウォーグル!!」
「ガブリアス…ナイスファイトだったぜ！」
「グル…ルゥ……」
　自身も巻き込む形でストーンエッジをウォーグルに撃ち込み、そのまま共倒れになる。
　これでお互い残り一体。なるべく避けたかった状況に無理矢理持っていかれたのは悔しいが、タイプ相性的に未だ此方にイチニアシブはある。
「敵を取るぞ、ガブリアス!!」
「げっ、そっちも持ってたか…だからって降参はしねぇけどな！決めるぜウルガモス!!」
「グァルゥウゥッ!!」
「ぷぴぃぃぃっぷ!!」
　昨日見せた眠そうな雰囲気は何処へやら。雄々しく鳴いて仲間の敵を取らんと目の前の敵に闘争心を燃やすガブリアス。対するウルガモスも闘争心を燃やしており、メラメラと6枚の羽が燃えているようにも見える。
　タイプ相性は此方の勝ち、しかし相手の道具が分からない。襷と思ってたらガブリアスがそれだったし、カイリューは直ぐに落としたから何を持っていたか分からない。候補としては命の珠か、岩四倍を軽減するヨロギ。
（技構成は多分バレてるだろうな…エッジ飛ばしたいところだけど……今だと外しそうだ。エッジだし）
（タイプ相性は最悪、あのガブリアスの技構成は恐らくおいらのガブリアスとほぼ同じだろうけど…エッジは来ないだろうな。このタイミングだと被弾はない確率の方が高い。エッジだからな）
　本当ならストーンエッジをうって即試合終了にしたいが、ワロス

トーンエッジの別名を持ってるコイツならきっと外れる。もしこの状況に論者の友人が陥ってたら「んんｗｗｗ必然力でカバーですぞｗｗｗｗ」といって迷わずストーンエッジをぶちかますのだろうけど俺はそこまで勇敢じゃない。

「剣の舞！」

「蝶の舞！」

　お互いにステータスを上昇させる技を行わせる。バンジロウもストーンエッジは無いと思ったのか外すと思ってやったのだろう。良かった撃たなくて。撃ってたほうが正解だったのだろうけど、こういう状況で外しまくるストーンエッジを経験しているのもあって怖じ気ついてしまった。

（このターンだな…）

（この一撃で決まる…！）

　ガブリアスもこの一撃に掛かっていることが分かっているのか、俺を見て小さく頷いた。

「決めるぞガブリアス…!!」

「ウルガモス、任せたぜ！」

「グァオォォッ!!」

「ぷぴぃぃぃっ!!」

「ガブリアス！」

「ウルガモス！」

「「決めろ!!」」

　その声と共にお互いへ立ち向かう二匹。俺とバンジロウはその結末をじっと見守っていた。其々が其々のポケモンが勝つと信じて。

2―7：いざ行かんヒオウギ、三日ぶりに！

「はぁ…」
「っしゃ、おいらの勝ちだな！」
ガッツポーズをするバンジロウと落ち込む俺。結果からいうと試合に負けてしまった。敗因は「道具を持ってる」と思い込んでしまったこと。
なんとゲームで持っていた道具は丸ごと没収されていて、それに気付かないままガブリアスなら襷で耐えて落とせるタカを括っていた結果である。ようするに慢心してしまったのが俺の最もたる敗因だ。道具を持っていると思い込んだのは二の次として。
「ホレ、ポケモン回復してやるよ！」
「ああ…ありがとう」
「しっかしまさか道具なしでおいらをここまで追い込むとはなぁ…ガブリアスが襷もってたらおいらの負けだったぜ？」
「俺もそう確信したんだけどな…持ち物の確認はちゃんとしないといけないな」
「だな！ほい、回復完了っと」
ポケモンを手渡されてホルダーにしまっていると、メイがペンションからツタージャを抱えて出てきた。ツタージャの手には紙パックのモーモーミルクが。
「二人ともお疲れ様！」
「タジャ！」
「おお、サンキューな！」
「ありがとう…何処にあったんだこれ？」
「冷蔵庫に入ってたよ？」
（あれ？俺が見たときはそんなの無かった気が…あ、知らない方が良いことなのかもしれない）
「？」
少し青冷める俺に首をかしげるメイ。モーモーミルクは普通に美味しく、元いた牛乳とはまた違った新鮮な味わいをしていた。野菜類

もそうだけどこの世界の食材は美味なものから変わったものが多いなと痛感する。
（ポケモンの世界の食というものにハマりそう）
「それで、どっちが勝ったの？」
「おいらだ！」
「…残念ながら」
「ええっ!?お兄ちゃん負けちゃったんだ…」
「ああ…悔しいが」
「まぁ、おいらは道具ありだったがお前の兄は道具なしのハンデ積んでたからな。無自覚で」
「なんだ、それなら仕方ないよね」
「……それだと道具ありならおいら負けてたって言い方だな。実際そーだけどさ」
「勿論！だってお兄ちゃんは最強だもん！」
　えっへん！と胸を張るメイ。ツタージャを抱えているから腰に手は当てられないがその代わりにツタージャがメイの代わりに腰に手を当ててメイの真似事をしていた。負けて荒んだ心には丁度よい清涼剤だ。
「んじゃ、おいらは楽しめたしこれで…じゃねーや、メイに渡すもんあったの忘れてた！」
「私に？」
「おう！というかそっちが本題だな！」
「俺とのバトルがしたくて忘れるってお前…」
「い、いいじゃねーか！それよりも！ホレ！」
　そう言ってメイに差し出されたのはモンスターボール。もしかして白の樹道と黒の摩天楼クリア後にもらえる色違いのフカマルかミニリュウのイベントかと思っているとメイがボールの中身を尋ねた。
「そん中にはフカマルが入ってる！」
「フカマル？」
「ガブリアスの2進化前だな」
「その通り。チェレン？ってヤツから預かってたの昨日思い出して

な。で渡しに来たって流れだ！」
「チェレン…だって？」
「その人って二年前の英雄の…！」
「あー…確かそんな名前だったな、英雄」
　興味がなかったからか、そういえばみたいな形で納得するバンジロウ。彼の発言からするとチェレンはメイが旅立つということを知っていた事になる。
　いや、先輩なんだから知っていて当然か？でもそれなら態々ジムリーダーをアデクに変えたり、バンジロウにフカマルを預けさせるという遠回りな事は俺の知っているチェレンなら億劫に感じてやろうとしない。
（…ダーメだ、憶測だけでしか考えられない現状で決め付けるのはよくないよな。まだ会ってすらいないし……メイがアデクとの対決後に直接聞いてみるべきか）
「そういうわけだメイ！フカマルを育ててくれ！」
「（ガブリアスの2進化前ということは……お兄ちゃんと一緒…）うん！任せて!!」
「おー、気合い入ってるなー！」
（順調に育てていけば手持ちの一体が兄と同じになるからな…意気込むのも頷ける）
「じゃあフカマルは任せるとして…二人はじいちゃんに挑むためにヒオウギに一旦戻るのか？」
　バンジロウの問いに二人して頷く。俺は挑む気無しだけどメイは挑む気満々のようだ。やる気に満ち溢れた瞳をバンジロウに向けている。
「そか。ならまあ頑張れよ！贔屓目なしでじいちゃんは強いからな。生半可な攻撃じゃすぐやられるぜ？」
「ぜ、前チャンピオンだもんね……！」
「とはいえちゃんとメイの実力に合わせてくれるからそこは安心していいと思う。トレーナー成り立てにレベル差５０オーバーを差し向けるのは流石に…な」

まあ敢えてそのレベル差を維持してストーリーをクリアする猛者もいるのだが、あれはポケモンを知り尽くしたホンモノか物好きか正真正銘のマゾが挑む領域なのでメイにその枷を填める必要は全くない。というかやれと言われても首を縦に振る人はまずいないだろう。前述した条件に当てはまる人か大金でも積まれない限りは。

（そういえば、レベル1ポケモンを対戦で起用してるユーザーもいたなぁ）

レベル1の特性頑丈ポケモンに「貝殻の鈴」を持たせてがむしゃらを利用したコンボ。道具枠と手持ち枠を一つ使うのが難点だがやられる側はたまったもんじゃない。

レベル1が50を上回るのは先制の爪か先制技でもない限り絶対にあり得ない事を逆手に取った戦法の一つだ。

何故これが驚異なのかというと、ポケモンの世代がBW…通称「第5世代」に移った時に行われた特性の見直し。その見直しで頑丈は”一撃必殺の効果を無効にする”から”一撃必殺の効果を無効にし、且つ体力が100%の時に瀕死レベルのダメージを受けても一撃で倒されない”という効果に変わり、レベル1の頑丈持ちかつ遺伝技でがむしゃらを覚えたポケモン…要するにココドラにスポットライトが当てられた。

（対戦で当たったときは…キツかったなぁ。襷と違って”体力100%なら何度でも発動する”だから質が悪いのなんのって。しかもたべのこしと違って貝殻の鈴だからダメージ量で普通に全回復するっていう）

「お兄ちゃん？」

「ん、あ…どうした？」

「えっと、さっきから誰もいないところで頷いてたけどどうしたのかなって」

「あーいや、がむしゃらなココドラは質が悪いなと」

「がむしゃらな…ココドラ？」

「気にしなくていいよ。多分遭遇することはないから…って、バンジロウは？」

レベル1ココドラに懐かしさを懐いていたらバンジロウが居なくなっていた。その事にメイが不機嫌そうに「お兄ちゃんを気味悪がって帰った」との事。実の兄が気味悪がられて不機嫌になってくれたのなら嬉しいが、残念ながらバンジロウが正しい。
「うー…」
「まあそう唸らない唸らない。バンジロウの行動は間違っていないんだからさ」
「そうだけど…」
「いやそうだけどって…そこは同意するんだな」
「だって言わないとまたしそうなんだもん」
「…否定できないのがまた何とも。まぁそれは以後気を付けるとして……もらったフカマルを見てみないか？」
「あ、それもそうだね！」
メイがフカマルの入ったボールを投げ、ボールが開放されると同時に中から出てくるフカマル。
ぽけーっとメイを見ているフカマルは俺の持つガブリアスと比べると若干色が薄く、所謂色違いの類に分類されるポケモンだった。
「かわいい…」
「ふかー？」
（そこはゲーム基準なんだなチェレン…）
「こんにちは、あなたの親のメイだよ」
「ふかー！」
「タジャー！」
「～～～っ！」
「…メイ？」
親というフレーズに反応したツタージャとフカマルの取った行動がツボだったのか、胸を押さえて可愛さによる感情のオーバーフローをこらえているメイ。
「お、お兄ちゃん…ポケモンって、凄いね」
「…そうだな」
「ふか？」

「タジャ？」
　はぁはぁと息を荒くしているメイにそれが以前知りたがっていた「尊い」という感情だと言いたかったが、ベルのように事あるごとに尊いと言うメイは見たくなかったので黙っておくことにした。
　目を反らした先には二匹揃って首を傾げているツタージャと体全体でどうしたのかと表現するフカマルが。原因はお前達だといっても理解しないと思ったので苦笑してやり過ごすことに。
　その数分後、漸く尊さから解放されたメイを連れてサンギ牧場の管理人さんのもとへ。尚メイの腕にはツタージャが抱かれている。ツタージャも嫌ではないみたいで、寧ろ喜んでいるようだった。
「やあ！よく眠れたかい？」
「おかげさまで…ありがとうございました」
「いやいや此方こそ！それでなんだけどね…もしよかったら生まれたばかりのメリープを貰ってくれないか？」
「え？い、いいんですか!?」
「タジャ!?」
　管理人さんからの提案に身を乗り出すメイとツタージャ。その剣幕に管理人さんが驚き、目を輝かせるメイに苦笑しながらも話を続ける。
「あはは…君達になら大丈夫かなと思ってね。それにそっちの女の子は新米トレーナーだとバンジロウ君から聞いてね。ならばと思ったのだが…どうかな？」
「是非！」
「タジャ！」
「…だそうです。出来れば俺からもお願いします」
　電気タイプのポケモンがいればフキヨセの攻略も大幅に楽になるし、メイもメリープのモコモコを気に入っていたから願ったり叶ったりだろう。
　食い付く様に答えるメイと苦笑しながらお願いする俺に管理人さんは笑顔で了承し、メリープの入ったボールをメイに手渡した。
「この子にいろんな世界を見せてやってくれ、他のメリープ達に僕も

旅の成功を祈っているよ」
「はいっ！」
「ありがとうございます」
「うん、それじゃあ頑張っ……あ、忘れるところだった！キミのミジュマルなんだけどね」
「……あ」
　管理人さんに言われてミジュマルの事を思い出した。メイの監視をすっぽかして別の事をしていたことは分かっていたが手持ちに入っていなかったことをすっかり忘れていた。どうやら管理人さんのお世話になっていた様でその事も重ねて礼を言うとまた管理人さんが苦笑する。
「君達がここにくるまでにメリープと戦闘しててね…最初は痺れさせられて僕が治療するの繰り返しだったんだけど……」
「けど？」
「繰り返してるうちに麻痺を克服したみたいで…その結果が……まぁ見てもらった方が早いかな」
「？」
　管理人さんがそう言って一旦席をはずし、すぐに戻ってきたと思えばその後ろにポケモンが。ドヤ顔しながら管理人さんの後ろを歩く姿がミジュマルを思い出す。
「フッ…」
「……えーと？」
「ガンガンメリープに挑んでいった結果、進化しちゃったみたいなんだ。キミのミジュマル……」
「フッ……」
　その日一番の俺の叫びが轟いた瞬間だった。

……

「じゃあ、ありがとうございました！」
「元気でー！また遊びに来てくれー！出来ればフタチマルは置いてき

てからー！」
「フッ!?」
「当然だろ…全く。善処しますー！」
管理人さんに見送られてサンギ牧場を後にする俺とメイ。フタチマルは何故自分が除外されたのか分かっていないようだった。
おまけに声がダンディからイケメンのソレに若返っていた。イケメンボイスはいいとして基本ドヤ顔だから勘違い系ナルシストに見えかねない。コイツの伴侶は大変だろうなと将来を心配してしまう。
（いや、まだダイケンキが残ってる…）
「タチマッ？」
「…まぁ、よろしく頼むぞ」
「フッ……！」
「…お兄ちゃんのフタチマル、すごく癖が強いよね」
「言うな…俺もどうしてこうなってるのか分からないくらいだから……」
ガクリと項垂れて大人しく進化してしまったフタチマルを受け入れる。勝手にレベルが上がってくれていたのは嬉しいが管理人さんが出禁にするくらいメリープと交戦したのかと思うと、このフタチマルは勇敢でも何でもなく只の戦闘バカなのかと思った。
「…ヒオウギに戻るか」
「うん、初めてのジム戦だね…！」
「そうだな。だが今のままだと勝てるか怪しいから…帰りながらポケモンを鍛えようか？」
「はーいっ！」
こうして俺達はサンギタウンを後にし、初のジム戦に挑むために一旦ヒオウギへ帰るのであった。

妹の初のジム戦！見守れ俺！
3―1：初めまして俺の名前

サンギから歩いて暫く。俺達は三日前に出たヒオウギシティへと帰ってきていた。三日だけだというのにまだ新鮮な気分が抜けない。
「結構歩いたな…メイは早速挑むのか？」
「そうしたいけど…ヒュウの妹さんが心配だから会いに行ってくるね」
「わかった。俺は一度家に戻るよ」
「家に？」
「ああ。ちょっと母さんに用があってね」
「それって…三日前の手紙のこと？」
「…まあ、そんなところだ」
メイから出た助け船に遠慮なく乗っかる。三日前の手紙…「ヤるならヤれ。でも責任はとれ」という内容に文句を言いに行くと思っているのだろう。勿論メイは中身を見ていないから何のことか分からないだろうが、湖に向けて全力投球した姿から何となく察したに違いない。
手紙の内容は兎も角として、スケープゴートになってくれた手紙を送ってくれた母に内心感謝する。
「また後で」
「うん。後で私も家に帰るね」
一旦メイと別れて俺は三日前の記憶を頼りに家へ向かう。移動の間、ヒュウの妹について考えていた。
ヒュウの妹はストーリー開始前…二年前にチョロネコをプラズマ団に強奪された被害者の1人で、御三家入手後に彼女に話しかけると「ポケモンを大事にしてあげて」とお願いしてくる。彼女がポケモンを好きだというのが最もな理由だろうけども、その裏側には自分が出来なかったからという想いもあるのだろうと二周目プレイでそう解釈した。

（此方の妹さんは、話すのも難しそうだけど）
メイが家に帰るのではなく真っ先にヒュウの妹の見舞いを選んだということは、何か重い病を患っているのかもしれない。ヒュウの妹で兄とヒュウが大ケンカしたというのも聞いてるし…確認したいところだが、無理に詮索するとボロが出てバレてしまうかもしれない。かといって知らないままだと何れどこかで綻びが生じてしまうのもまた事実。
（…隠しながらって、神経使うなぁ）
なけなしの精神を磨り減らすしかないこの先に溜め息を吐く。いっそバラしてしまおうかとすら思ってしまいそうだ。思うだけで留めておくけど。
なんて思ってあるいているとメイの実家に辿り着いた。インターホンで母を呼び出し、扉を開けてもらう。
「おかえり、もう回ってきたの？」
「いやゲームじゃないんだし…忘れ物のついでに近況報告ってところかな」
「あらそう。もしかしなくてもコレでしょ？忘れ物」
そう言って取り出したのは兄のトレーナーカード。どうやら本当に忘れていたみたいで安心した反面この三日間身分証明が出来なかったことに冷や汗を掻く。
「気を付けなさいよ？」
「ありがとう母さん」
カードを確認する。予想通り其処には兄の顔と兄の名前…そして現在の所持金額がカードに記載されていた。どうやら所持金額はゲームデータを引き継いでいたみたいで莫大な量の金額が口座に入っていた。
余談だが渡されたトレーナーカードはゲームのカードとかなり違っていて、スマートフォンを更に薄くして個人情報のデータ計測だけに集中させた薄型カードデバイスみたいな男心を擽るモノへと変わっていて、非常にカッコいい仕上がりになっている。
（…成る程、ね）

名前欄に登録された兄の名前。これで名前を聞かれたときにどもることなく答えられる安心感と自分の名前とは違うことにやはり”転生”ではなく”憑依”という事に気付かされ、複雑な気分になる。
「なに？自分のトレーナーカードをまじまじと見つめて？自分に見惚れてたのかしら？」
「…俺、変わってないよな？」
「変わってないよなって……当たり前でしょ？貴方は貴方よ。産まれたときから私の息子に変わりないわ」
「…そう。ごめん母さん。変なこと聞いた」
全くね。と答えて家に招き入れる母。見た目は確かに息子だが中身は全くの別人だということに今更母への罪悪感を覚えてしまう。
言ってしまえば性格の上書き。元の兄は身体こそあれど中身は存在しない。憑依というのは言い換えれば乗っ取りであり、其処に前の宿主の意思など関係ない。
（……あーダメだ。ネガティブになったら余計な心配を招いてしまうな。ポジティブにいかないと）
「それで？近況報告を聞かせてもらいましょうか」
「え？あ、ああ…といっても三日間分だけども」
其処からはメイの事を含めての近況報告に。
といっても大体がメイの事ばかりで、彼女がポケモン図鑑を受け取ったことと新たなポケモンが増えたこと、そして俺にポケモンバトルで勝ったこと等々…メイが憤怒状態に陥ったこと以外は全て母に報告した。
「そう、まさか貴方を打ち負かすなんてね」
「うん…俺が未熟なのもあるけど、きっとメイは俺を越えるトレーナーになると思う」
「あら、それでいいの？」
「まさか。そんな簡単に俺を越えさせはしないよ」
ゲームだが、ポケモントレーナーとしてのキャリアは十年以上の経験を持っているのだから一年未満のルーキーに追い付かれる訳にはいかない。とはいえポケモンゲームの主人公はプレイヤーが操作す

るからというのもあるが、ポケモンに関するセンスは抜群でその気になれば僅か４時間でチャンピオンになる主人公だっている。その場合だと大体がＲＴＡ（リアルタイムアタック）トレーナーが殆どだが。
「ただいまー！」
「あら、おかえりなさいメイ」
「ただいま、お母さん！」
「おかえりメイ」
「お兄ちゃんもおかえりなさい！」
「ああ。ただいま」
「あらー？実の親の前でいちゃつくのね？」
「ち、違うよお母さん！お、お兄ちゃんとは…まだ、そんな関係じゃないもん……」
（あー…まだって表現は…）
「まだ、なのね？」
「あ、えと、そういう訳じゃなくて…!!」
（こうなるからなぁ……）
お決まりの展開に苦笑しながら親子の会話を見守る。母のからかいに顔を赤くしながら此方を見てくるメイ。目が合ったときに笑ってやると慌てて顔を逸らした。可愛い奴め。
「…我が息子ながら女誑しねー」
「いや、女誑して…（ラノベの主人公じゃないんだからさ…兄のスペックはラノベ感が強いけど）」
「…お兄ちゃんのいじわる」
「メイまで!?」
むすー。っと赤面しながらジト目で見てくるメイ。怖いどころか寧ろ可愛いと言うとまた顔を逸らされるので心の中だけで可愛いと告げる。
女誑しとはいっても今のところまだフラグが立ってるのが確認できているのメイだけだからそうでもないと思うが…まさか兄はよくある無自覚系女誑し（朴念人）というラノベ踏襲型イケメンなのかと頭を過った。

「まさか、俺他にも？」
「それは無いわね。貴方無愛想だから」
「…悪かったな、無愛想で」
（私は寧ろ無愛想の方がライバル少なくて嬉しいからいいけどなぁ…）
（どうやらフラグはメイだけか…今のところは）
　どうせこの先でもフラグが立つ相手はいるんだろう。テツやルリとかゲーム本編でも普通に立っててもおかしくなかったし。あと観覧車イベントのＭＯＢとか。夏？俺の持っているＢＷシリーズの観覧車は夏イベ実装はされていない。ナツミとか知らない。エナツはまあ…好きな人は好きなイベントだろう。ナツミショックに関しては忘れさせてくれ。
「それで、メイはジム戦なんだって？」
「うん！」
「頑張りなさい。ポケモン達と一緒にね」
「勿論だよ！」
「アンタはどうするの？」
「俺はメイの試合を見守るよ」
「そっか。お兄ちゃんは全部のバッジ持ってるもんね。私もお兄ちゃんの試合見たかったなぁ…」
（え？そうなのか…ってまぁ、レベル１００が３体もいればそりゃ取っててもおかしくないよな）
　メイの一言でこの兄は既に各地のジムリーダーとは顔見知りであり、イッシュを一度制覇しているということがわかった。これは思わぬ収穫で非常にありがたい…が、それってつまりさっきの女誑しが女性ジムリーダー相手に発動していたという可能性が。
（……ありえなくもないな。最悪その辺のＭＯＢにも発動している可能性もある）
　ＢＷシリーズの女性ＭＯＢは確かに可愛くデザインされたキャラクターが多く、また観覧車イベントによって一部のＭＯＢは更にその可愛さを倍プッシュしてくる。しかも男女其々にパターンがあるの

でどちらにもウケがいい。勿論ネタ方面でもウケがいい。個人的にオススメはＢＷのミハルがとても良い。夏の前座として送られた彼女との観覧車イベントは「おい、付き合えよ」というレベルで甘ったるく、それが夏への期待を増幅させてくれる。そしてその期待を初代～金銀時代の大爆発よろしく木っ端微塵に粉砕してくれるのがヤツなのだが。

「うぅ…不安になってきた」

「大丈夫、俺が傍で見守る」

「！…えへへ、なら頑張れるかも」

「そうか？なら良かった」

「ああ、ヤるならちゃんとメイの旅が落ち着いたらするのよ？今はこらえなさい？」

「ぶっとばしますよ母上様」

笑顔でとんでもないことを喋った母に笑顔で返す俺と母の言った意味がわからず首を傾げる純粋なメイ。何れ知る時までそのままでいてほしいと切に願う。

もしメイが意味を知ったら……

「…私、お兄ちゃんになら…いいよ」

月明かりに照らされたメイの裸体…一糸纏わぬその身体は少女というには些か発育が良く、もしも自分が兄という立場でなければ自制心などとうの昔に破壊されていたに違いないと断言できるほど、メイは蠱惑的な雰囲気を纏っていた。

「め、メイ？俺達は兄妹だぞ？」

「それでもいい……私はお兄ちゃんと、一つになりたい。繋がって、愛し合って……」

うわ言の様に呟きながら、俺の上に跨がる。

そんなメイの瞳には心なしかハートが浮かんでいるように見え、蕩けた表情で俺を見つめながらゆっくりと俺の身体に自身の身体を重

ねてゆく。
　どくん。どくん。と互いの鼓動が混ざりあって溶け合い、俺の理性の箍も次第に外れてゆく中…メイは更にダメ押しを掛ける。
「――――、……がまん、しないで？」
「……っ！」
　お兄ちゃんではなく個人の名を呼び、雌の顔と重なりあった極上の裸体。後押しする様に股関に自身の濡れた股関を押し付けてアピールをしてくるメイにとうとう箍が外れた俺は――――

――――――――――――――――

（なりかねない。夜這いルート待ったなし）
　メイに聞かれてその意味を教えるのはせめて旅が終わったらにしよう。今教えるのは俺の貞操が危ないし…いや、危なくてもそれはそれで良いのだけれども、万が一旅の途中で身籠るなんて事になったら旅そのものを中止しなくてはならなくなる。
　それでメイがバッドエンドにならないのならいいかもしれないが、ポケモンのゲームはギャルゲでもエロゲでもなくＲＰＧなのだからそんな展開は必要ないし、あったとしてもストーリークリア後の後日談が妥当だ。
「お兄ちゃん、ヤるって？」
「知らなくていいことだよ」
「そうよ。何れお兄ちゃんが文字通りその身をもって教えてくれるから、それまで待っていなさい？」
「母さん？」
「うん。お兄ちゃんが教えてくれるなら待つ」
（待ってほしくないんだがなぁ…）
　はっきり言って俺の知識はエロゲとエロ本に同人誌の知識だけなのでまるであてにならない。この兄はどうか知らないが、きっと俺と同じだろう。着替えるときにそれっぽいのがクローゼットに隠れてたし。

「…そろそろ行くか？」
　気まずくなってお暇しようとメイに提案すると頷く。といっても俺の感情を察したわけではなく、早くジムに挑みたいという思いがひしひしと伝わってくる。
「あら、もう行くの？」
「うん！」
「ヒオウギのジム報告でまた戻ってくるよ」
「そう。じゃあ二人の好きな料理をつくって待ってるわね。いい報告を待ってるわ」
「任せて！行ってきます！」
「行ってきます」
　母に見送られ、俺達はヒオウギジムのあるトレーナーズスクールへ走り出す。その背中を見ていた母が「本当に…私の若い頃にそっくりね」と涙目になりながら呟いていたのを俺達は知る由もなかった。